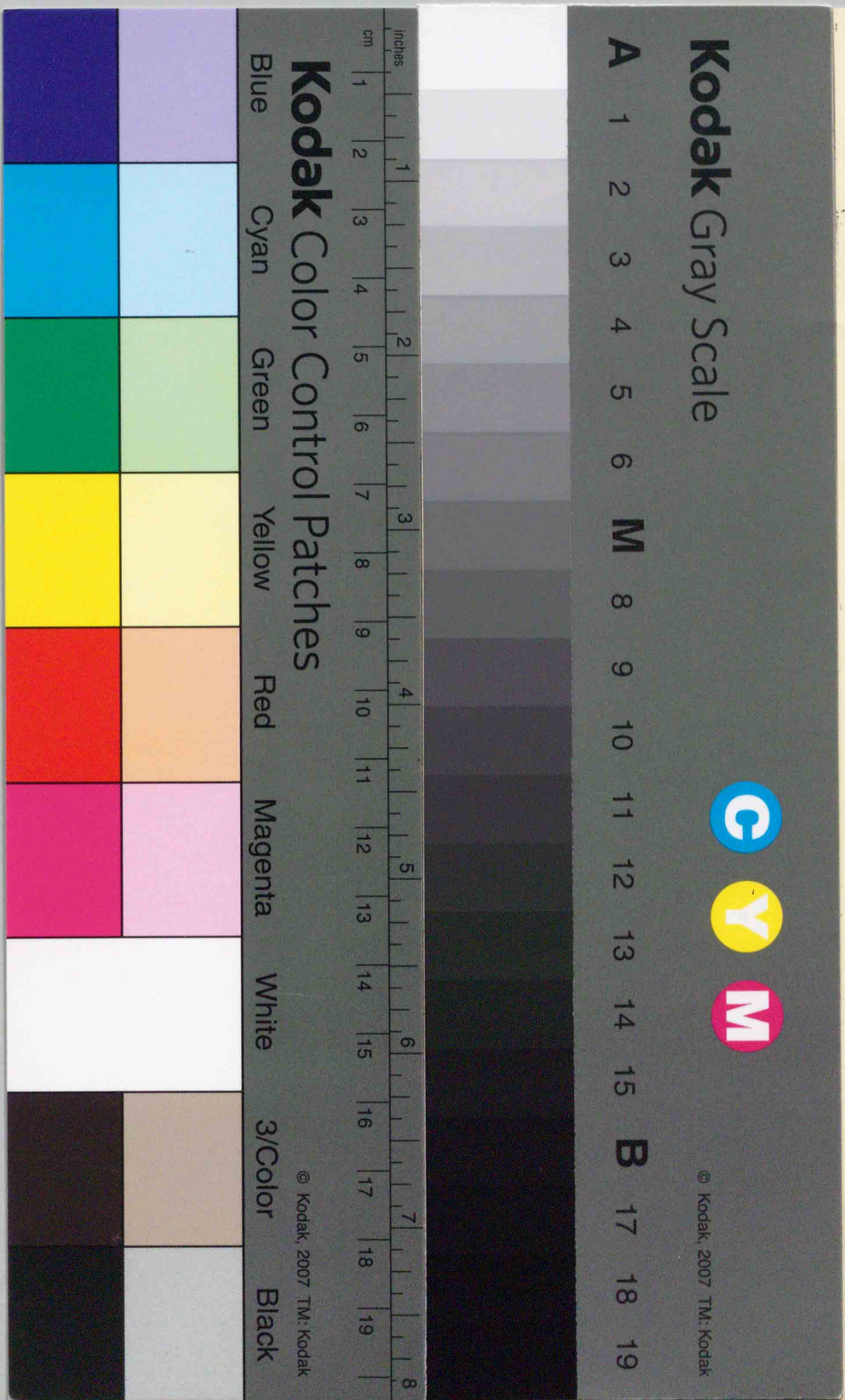
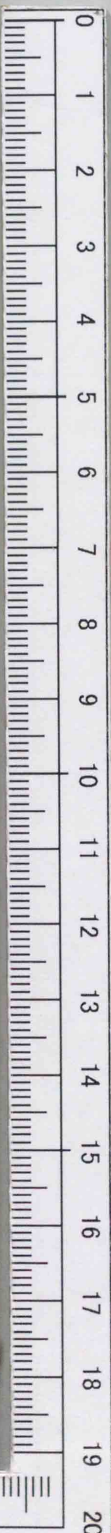


中等國文讀本

卷七

3759
Fu10
資料室



41474
教科書文庫

| |
|----------------|
| 4 |
| 810 |
| 41-1916 |
| 2000 301687 |



© Kodak, 2007 TM: Kodak

375.9
Feb 10

資料室

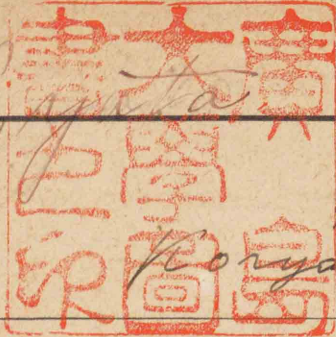
日七十二月一年五正大
濟定檢省部文
書科教科語國校學中

文學博士藤井乙男編

中等國文讀本

金港堂書籍株式會社發兌

42772



*Y. C. & Yata
middle
School*

中等國文讀本

卷七 目次

40 矢田英

| | | | |
|---|-------|------|----|
| 一 | 朝思暮想 | 幸田露伴 | 一 |
| 二 | 修養 | 卜部兼好 | 五 |
| 三 | 森 | 與謝野寬 | 六 |
| 四 | 大原御幸 | 鹿島市外 | 八 |
| 五 | 連歌と俳諧 | 鹿島市外 | 一七 |
| 六 | 黃蝶白蝶 | 鹿島市外 | 三 |
| 七 | 奥の細道 | 松尾芭蕉 | 二四 |
| 八 | 五月闇 | | 二九 |

目次

九 勇……………坪内雄藏……………三

一〇 海運…………………………三

一一 河村瑞賢…………………………四

一二 凶荒異災……………鴨長明……………五

一三 儉約……………卜部兼好……………五

一四 華嚴瀑……………大町桂月……………五

一五 嚴の鉾杉…………………………六

一六 はてのみゆき……………前田利定……………六

一七 明治天皇御大葬儀誄詞……………西園寺公望……………七

一八 武藏野……………小島烏水……………七

一九 印刷術……………芳賀矢一……………八

二〇 學の道……………本居宣長……………八

二一 新井白石と本居宣長……………上田萬年……………八

二二 月……………島崎藤村……………九

二三 君臣奇遇……………新井白石……………九

二四 金陵……………佐々木信綱……………一〇

二五 熊野落…………………………一〇

二六 常陸帶……………藤田彪……………一一

目次終

中等國文讀本卷七



一 朝思暮想

幸田露伴

朝思暮想、朝思暮想。善いかな、朝思暮想や。人當に朝思暮想すべきなり。

思ふを人といふ。思はざるを土といひ、石といふ。日出でて思ふ。思ふによりて、人幸に人たるなり。然らずんば人の土石たること久しからん。

想ふを我といふ。想はざるを木といひ、竹といふ。日入つて想

ふ。想ふによりて、我幸に我たるなり。然らずんば我の木竹た
ること久しからん。

人の土石たるを免れ、木竹たるを免るゝは、たゞ思ふあり、想
ふあるが爲なり。大いなるかな、思想の人に於けるや。

朝思暮想、朝思暮想。愚なるかな、朝思暮想や。人當に朝に思無
く、暮に想無かるべきなり。

思ふを苦といふ。思ふ無きを安といひ、樂といふ。眼を思ふ時
は、眼を病めるなり。財を思ふ時は、財に渴せるなり。道を思ふ
は、道猶未だ我に存せざるなり。日出でて、便ち思ふ。これ日出
でて、便ち苦有るなり。その思ふ無きに當りては、即ち苦無か
らん。徒らに思ひ、徒らに苦しみ、多く思ひ、多く苦しむ。思の
即ち苦無か

ち苦なるを知らざるに非ずして、しかも思はざる能はずし
て思ひ、苦しませざる能はずして苦しむ。人も亦土石に如かず
といふべし。

瞿然

勃窣
日初出時、見
城門・樓櫓・宮
殿・行人出入。
但可三眼見。無
但有實名。乾
闥婆城。大智
度論
萎頓

想ふを癡といふ。想ふ無きを明といひ、達といふ。鬼を想ふ者
は中夜瞿然たり。鬼の來りて我を惱ますに非ず、吾の想の我
を惱ますなり。その癡惑むべし。梅子を想ふ者は舌頭酸を覺
ゆ。梅子の來りて、我を欺くに非ず。吾の想の我を欺くなり。そ
の癡笑ふべし。法を想ふものは、理窟勃窣葛藤荆棘の中に七
顛八倒して、枉げて心力を傾注し、乾闥婆城を成し、氣盡き身
衰ふるに及んで、頹然として萎頓疲弊す。その癡、また悲しみ
傷むべし。日入りて、猶想ふ。これ日入りて、猶癡なるなり。その

想ふ無きに當りては、即ち惱まざる、無く、欺かる、無く、萎頓疲弊すること無く、清風空を度り、明月軒に當るの状あらん。空しく想ひ、空しく癡に、愈々想ひ、愈々癡なる、想の即ち癡なるを悟らざるにあらざる能はずして想ひ、癡ならざる能はずして癡なる、人も亦木竹に如かずといふべし。

人の土石に如かず、木竹に如かざるは、たゞ思ふあり、想ふあるが爲なり。奇なるかな、思想の人に於けるや。
朝思暮想。朝思益有るなり、暮想功有るなり。人須く朝に思ひ、暮に想ふべきなり。朝思暮想。朝思益無きなり、暮想功無きなり。人應に朝に思無く、暮に想無かるべきなり。

百日之を學ぶ、一日進んで思ふに若かざるなり。百日之を思ふ、一日退いて學ぶに若かざるなり。朝思も可、暮想も可。たゞ必ず一學字を透過するを要す。(蝸牛庵夜譚)

二 修養

ト部兼好

能をつかんとする人、よくせざらん程は、愁に人に知られじ、うちよくならひえてさし出でたらんこそいと心に、からめと常にいふめれど、かくいふ人一藝もならひ得ることなし。いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、諷り笑はるゝにもはぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性その骨なげれども、常に泥まみだりにせずして年を送れば、

愁、愁

かたほ

つれなく

瑕瑾、瑕疵

放埒

堪能云性のたしなまざるよりは、遂に上手の位に至り、徳長け人
 に許されて、ならびなき名を得ることなり。天下の物の上手
 といへども、始は不堪の聞えもあり、無下の瑕瑾エモもありき。さ
 れどもその人、道のおきて正しく、これを重くして放埒やりけらせさ
 れば、世の博士博士にて、萬人の師となること諸道ビの道かはるべから
 ず。(徒然草)

三 森

與謝野 寛

はろばろ

駿河なる富士の麓の大裾野、
 高原くれば、はろばろと目路目路は擴がり、
 こゝに今直立の木の太木の

杉のひとむら、眞黒にも神さび立てり。

木のかげは吹雪に、雨に、炎熱に、

旅ゆく人を憩やすはせて、千尋に延びぬ、

この森を要として、は、八岐に

路の分れぬ、末廣の扇のかたち。

八岐

揚雲雀

わかみどり野は春草の色萌えて、
 霞める空に揚雲雀オシロイソウ優やさに歌へり。
 中をゆく路はおのゝ面白し。
 甲斐へ、武藏へ、相模路へ、都の市へ。

正覺

うら安

法皇—後白河
建禮門院—安
德天皇の御母
平清盛の女
大原—山城國
愛宕郡

こゝに於て今感ずるは、いにしへの
菩提樹下なる正覺の聖のこゝろ。
八岐の路の何れも行くによし。
わが行く方は、やがて皆うら安の國。

(櫛の葉)

四 大原御幸

法皇は、文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御住居
御覽ぜまほしく思しめされけれども、二月・三月の程は、嵐烈
しく餘寒も未だ盡きず、峯の白雪絶えやらで、谷のつらゝも
打融けず、かくて春過ぎ夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜

後徳大寺—左
大臣藤原實定
花山院—大納
言藤原兼雅
土御門—權中
納言源通親

行幸
御幸
行幸
公卿
大臣公卿
公卿
大臣公卿

をこめて大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、
供奉の人々には、後徳大寺・花山院・土御門以下公卿六人、殿上
人八人、北面少々候ひけり。
遠山にかゝる白雲は散りにし花のかたみなり、青葉に見ゆ
る梢には春の名残ぞ惜しまる。卯月二十日餘りの事なれ
ば、夏草の茂みが末を別け入らせ給ふに、始めたる御幸なれ
ば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたる程も思しめし知
られてあはれなり。西の山の麓に一字の御堂あり、即ち寂光
院是なり。古う造りなせる泉水・木立よしある様の處なり。豊
破れては霧不斷の香を焼き、扉落ちては月常住の燈を挑ぐ。
とも、かやうの所をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を

四 大原御幸

亂る

殿上人
 四位五位
 今いふ身
 傷ら紫
 一蔵今そ漬涼
 殿上向ニ身殿
 言ハレシム
 夏山の青葉まじりの
 あそ櫻初花よしも
 めづらしき花



(一其) 圖の幸御原大筆山觀村下

亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらす
 かとあやまたる。中島の松にかゝれる藤
 波の、うら紫に咲ける色、青葉まじりの遅
 櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲き亂れ、
 八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、
 君の御幸を待顔なり。法皇これを觀覽あ
 つて、かうぞあそばされける。

池水に江の櫻散りしきて、

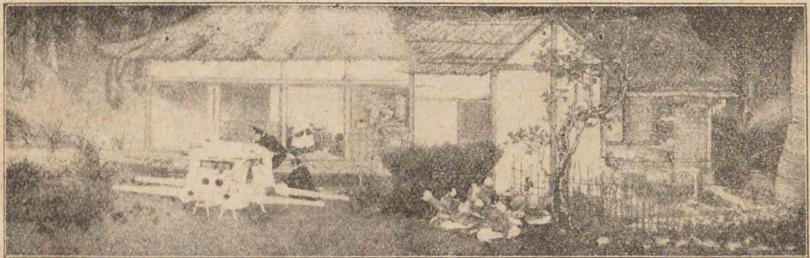
波の花こそさかりなりけれ。

ふりにける岩の絶間より、落ち來る水の
 音さへ、ゆるよしある處なり。綠蘿の垣、翠

瓢箪屢空、草
 滋顏淵之巷。
 藜藿深鎖、雨
 濕原憲之樞。
 (本朝文粹、橘直幹
 申文、また和漢助
 詠集にも出づ)

くわい小笹

ませ垣



(二其) 上 同

黛の山、繪にかくとも筆も及びがたし。さ
 て女院の御庵室を觀覽あるに、軒には蔦
 朝顔はひかゝりしのお交りの忘草、瓢箪
 屢空し、草顏淵が巷に滋し。藜藿深く鎖せ
 り、雨原憲が樞を濕す。ともいひつべし。杉
 の茸目もまばらにて、時雨も霜もおく露
 ももる月影に争ひて、たまるべしとも見
 えざりけり。後は山前は野邊、いささを笹
 に風さわぎ、世にたへぬ身のならひとて、
 うきふし繁き竹柱、都の方の音信は、閑遠
 に結へるませ垣や、纔かに言とふものと

つま木
まさきのかづ
青つら
五戒不殺生
戒不偷盜戒
不邪淫戒不
妄語戒不飲
酒戒
十善不殺生
不偷盜不邪
淫不妄語不
綺語不惡口
不兩舌不貪
欲不瞋恚不
邪見
伽耶城今の
伽耶市佛成
道の遺跡なる
佛陀伽耶は
この市城の南
方十哩の處に
あり
檀特山また
彈多落迦山と
もいふ古印
度の西北健駄
羅國の山名

ては、峯に木傳ふ猿の聲、賤がつま木なぐきの斧の音、これ等が音信
 ならでは、まさきのかづら青つゞらくる人稀なる處なり。
 法皇、人やある、人やある。」と召されけれども、御いらへ申す者
 もなし。やゝありて老い衰へたる尼一人参りたり。女院は何
 處へ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、此の上の山へ花摘みに
 入らせ給ひて候。」と申す。さこそ世を厭ふ御習といひながら、
 さやうの事に仕へ奉る人もなきにや、御いたはしうこそ。」と
 仰せければ、この尼申しけるは、五戒十善の御果報つきさせ
 たまふによつて、今かゝる御目を御覽せられ候にこそ。捨身
 の行になじかは御身を惜しませ給ひ候べき。むかし、悉達太
 子は、十九にて伽耶城を出で、檀特山の麓にて、木葉を連ねて

肌をかくし、峯に上つて薪を採り、谷に下りて水を掬び、難行
 苦行の功によつて、終に成道正覺し給ひき。」とぞ申しける。此
 の尼の有様を御覽すれば、身には絹布の別も見えぬものを
 結び集めてぞ著たりける。あの有様にても、かやうの事を申
 す不思議さよと思召して、抑、汝は如何なる者ぞ。」と仰せけれ
 ば、此の尼さめくくと泣きて、暫は御返事にも及ばず。やゝあ
 りて涙をおさへて、申すにつけて、憚り覺え候へども、故少納
 言入道信西が女、阿波の内侍と申すものにて候なり。母は紀
 伊の二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘
 れさせ給ふにつきて、身の衰へぬる程思ひ知られて、今更
 せん方なうこそ候へ。」とて、袖を顔に押し當てて、忍びあへぬ

いとほしみ

來迎の巫尊

善導唐僧、道綽禪師に就いて淨土教を究め、これを大成す。永隆二年寂す。(三三三—三四一)九帖の御書、善導所述の佛淨名居士維摩。毗舍離國の長者にして、釋迦と時代を同じうす。

さま目も當てられず。法皇、實にも汝は阿波の内侍にてこそあなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても唯夢とのみこそ思しめせ。とて、御涙せきあへ給はねば、供奉の公卿殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたるに、申すこそ理なれ。とぞ各感じあはれける。

さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて、^{シヤク}勸覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲をかけられたり。左に普賢の畫像、右に善導和尚並びに先帝の御影をかけ、八軸の妙文九帖の御書も置かれたり。^{老若}蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ち上る。かの淨名居士の、^{天四戸}方丈の室の内に三萬二千の床をならべ、十方の諸佛を

請じ給ひけんも、か^クくやとぞ覺えける。障子には、諸經の要文ども、色紙に書いて所々にお^ハされたり。

さて傍を勸覽あるに、御寢所とおぼしくて、竹の御竿に麻の御衣、紙の衾^{フク}なんどかけられたり。さしも本朝漢土の妙なる類、數をつくしし綾羅錦繡の粧、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、まのあたり見奉りし事ども今のやうに覺えて、皆袖をぞしぼられける。や、あつて、上の山より濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩の岨路^{ケノシヨリ}を傳ひつゝ、下り煩ひたる様なりけり。法皇、あれは如何なる者ぞ。と仰せければ、老尼涙をおさへて、花筐^{ヒナ}臂^{ヒタ}にかけ、岩躑躅取り具して持たせ給ひて候は、女院にて渡らせ給ひ

岨路
花筐

候。つま木に蕨折り添へて持ちたるは、鳥飼の中納言維實が女、五條大納言邦綱の養子、先帝の御乳母、大納言の典侍の局と申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、皆袖をぞ濡らされける。

関伽

女院は世を厭ふ御習とはいひながら、今かゝる有様を見え参らせんずらん恥しさよ、消えも失せばや、と思召せどもかひぞなき。宵々ことの関伽の水、むすぶ袂もしをるゝに、曉起の袖の上、山路の露も繁くして、しほりやかねさせたまひけん、山へも返らせ給はず、又御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましましたる所に、内侍の尼参りつゝ、花筐をばたまはりけり。(平家物語)

五 連歌と俳諧

連歌は短歌一首の半を一人がよめば、他の一人が之に繼いで其の半をよむものにて、もと一種の遊技に過ぎず。其の起源は太古にありき。後鳥羽天皇の頃より、わけて和歌の餘興として之をもてはやし、一首のよみきりに止らず、首尾相繼いで二十句以上百句にも及びたりき。後、二條良基之を好みて其の式を定め、又勅撰に准じて菟玖波集を撰したりき。蓋し連歌の技たる深く精力を費すものに非ず。干戈匆忙の際も半日の閑を樂しむに適すれば、益世に行はれ、應仁の頃僧宗祇に至りて絶頂に達す。宗祇旅行を好みて詩才を養ひ、四

良基—道平の子、關白氏長者となり、太政大臣從一位に至る。(二六〇—二〇四八)

宗祇—(二〇八—二三三)

宗鑑一(二三三)
守武一(二三三)
一(三〇九)

貞徳一(二三三)
一(三三三)

貞徳
宗田
芭蕉
正風

古風
宗因一(二三三)
一(三三三)

方に流浪して定居なし。嘗て勅を奉じて新撰筑波集を撰す。
海内風靡して斯道の宗と仰ぐ。
かくて室町時代の末に當り、山崎宗鑑、荒木田守武あり、好んで連歌の俳諧體を詠じぬ。連歌の發句十七字を全詩として詠ずること、亦この頃に起れり。
江戸時代に至り、京の人松永貞徳、御傘を著して俳諧の式を定め、之を連歌より獨立せしむ。門人頗る多く、江戸幕府の世に俳諧の興りて連歌の廢れしは、實に貞徳の唱道によれり。されど其の作未だ幼稚に、又連歌の格を出でて、更に己が立てたる法に束縛せらる。この一派を古風と稱す。尋いで西山宗因大阪に起りて舊格を打破し、好んで謠曲、漢詩等の詞句

しうとの鳥の若葉茶のたけり
雪平水はつかりて洗ひぬが
うらなを吹きくは花をさし
新編たけの葉茶のたけり
木梅のたけり

貞徳一(二三三)
一(三三三)
宗田
芭蕉
正風

檀林風
花に吹く
風
鬼神もたしかにきけ

檀林風



芭蕉の肖像と筆蹟

はらの恥を
幸崎に
懐いて

を用ゐて、放縱なる一體を創む。之を檀林風といひて、また一時大に行はれたり。蓋し俳諧は宗因に至りて、頗る自在なる域に進めりと雖も、内容は猶空虚にして、多くは措辭の上に泛々たる滑稽を弄するに過ぎざりき。しかも元祿に芭蕉出でて其の地位を高くし、俳諧の面目爲に一新せられたり。

桃青一(二三三)
一(三三四)
季吟一(二三三)
一(三三五)
正風

松尾桃青即ち芭蕉翁は伊賀の人、京に出でて北村季吟に學び、後、江戸に來りて正風を起し、又東西に周遊して吟腸を養

其角(二三三)
 嵐雪(二三七)
 去來(二三二)
 許六(二三六)
 支考(二三五)
 支考(二三二)
 支考(二三九)

ひ其の風を擴む。詠ずる所人事よりも自然に多く、幽玄清淡にして廣く雅俗に涉る。四方翕然として靡き、俳諧これより遍く都鄙に行はる。門人に俊秀の士多く、江戸には榎本其角の豪放なる服部嵐雪の溫雅なるあり、他の地方には向井去來・森川許六・東花坊支考等
 いづれも一方の重鎮たり
 しが、師歿して後は、各其の好む所によりて説を立て、彼此對立して統一を失ふに至れり。
 俳諧の行はるゝこと益廣きにつけて、宗匠は時好に投じ、風調甚だ



蕪村の像と筆蹟

あいのまや
 のまら

船のりやあまをりる



也有の像と筆蹟

青と相竝んで斯道の二聖とすべし。横井也有は尾張侯の臣、殊に俳文を善くし、詞藻淡雅輕妙なり。なほ天明以後に於ても俳諧は遍く行はれしが、眞の技倆ある人少く、漸次俗了し

蕪村(二三六)
 支考(二三二)

也有(二三三)
 支考(二三二)

ゆくのみなりき。(日本文學史教科書に據る)

落花難上枝
破鏡不重照
(五燈會元)

養得自爲花
父母洗來寧
辨藥君臣(和漢朗詠集 仙家春雨 紀長谷雄)
祭如在(論語)

六 黃蝶白蝶

落花枝にかへると見れば胡蝶であつたかな

白山の神の本地本地無座説や雪佛

舐らせて養ひ立てよ、花のあめ。中元の

まさくと在すが如し、魂祭ぶたづぬします

秋や來るのうそれなる一葉舟木葉

古池や、蛙とびこむ水の音

静かさや、岩にしみ入る蟬の聲

明月や、池をめぐりて夜もすから

守 武

宗 鑑

貞 德

季 吟

宗 因

芭 蕉

同

同

鹽鯛のはぐきも寒し、魚の店

鐘一つ賣れぬ日はなし、江戸の春

黄菊白菊、その外の名はなくもがな

萬歳や、左右に開いて松の蔭

欄干にのぼるや、菊の影法師

裸子よもの著ばやらん、瓜一つ

白梅や、墨芳しき鴻臚館

牡丹散つてうちかさなりぬ、二三片

追剝を弟子に剃りけり、秋の旅

寒月や、枯木の中の竹三竿

同

其 角

嵐 雪

去 來

許 來

支 考

蕪 村

同

同

同

七 奥の細道

松尾芭蕉

首 途

月日は百代の過客にして、往きかふ年もまた旅人なり。船の上
 上に生涯を泛べ、馬の口捉へて老を迎ふるものは、日々旅に
 して旅を棲處とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいつれ
 の年よりか、片雲の風に誘はれて漂泊の思やまず、海濱にさ
 すらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巢を掃ひて、やゝ年も
 暮れ春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゞろ神のもの
 につきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて、取る物手につ
 かず、股引の破れを綴り笠の緒つけかへて、三里に灸するよ
 り、松島の月、先づ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が

天地者萬物之
 逆旅、光陰者
 百代之過客。
 (春夜宴桃李園
 序李白)

去年—元祿元
 年。白河の關—磐
 城にあり、奥
 州の關門な
 り。杉風—翁の門
 人、鯉屋藤左
 衛門といふ。
 別墅は深川六
 間堀にあり
 き。
 (三三〇七—三三九二)

別墅に移る。

草の戸も住みかはる世ぞ、雛の家。

彌生も末の七日曙の空朧々として、月は在明にて光をさま
 れる物から、富士の峯がすかに見えて、上野谷中の花の梢、ま
 たいつかはと心細し。睦じき限りは宵より集ひて船に乗り
 て送る。住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思、曾
 に塞りて、幻の巷に離別の泪をそゞく。

行く春や、鳥啼き魚の眼は涙。

これを矢立の始としてゆく道なほ進まず。人々は途中に立
 ち竝びて後影の見ゆる迄はと見送るなるべし。今年元祿二
 年奥羽長途の行脚唯假初に思ひ立ち、耳に觸れて未だ目に

感時花濺淚
 恨別鳥驚心
 (杜甫)

千住—武藏國
 南足立郡。東
 京の東北口。

草加一武藏國
北足立郡奥
州街道にあたる

いかに都へ来た
りあらはらむ
都へつげらむ
今日白河の關は
えぬと拾遺集
平兼盛

都をば霞と共に立
ちしやど秋風ぞ
吹く白河の關後拾遺集能因法師
都にはまだ青葉に
て見しやども紅
葉ちりしく白河の
關千載集源賴政
見て過ぐる人しな
ければ卯の花の
咲ける垣根や白河
の關千載集藤原季通

見ぬ境若し生きて還らばと定めなき頼みの末をかけ其の
日漸く草加といふ宿に辿り着きにけり。瘦骨の肩にかゝれ
る物先づ苦しむ唯身身イイマすがらにといてたち侍るを紙衣キモノ一衣
は夜の防ぎ浴衣・雨具・墨筆の類あるはさゆコトワルフトイハキヤイがたきはなむけ
などしたるはさすがにうち捨て難くて路次ミチノセの煩となれる
こそわりなけれ。

白河の關

心もとなき日數重なるまゝに白河の關にかゝりて旅心定
りぬ。いかで都へと便り求めしも理道理ニあるなり。中にも此の關は風
騷カの人心をとゞむ。秋風*を耳に残カレズルし紅葉*を俤にして青葉の
梢なほあはれなり。卯ウの花ハナの白妙ウツクシクに茨の花アザミの咲きそひて雪

清輔の筆一清輔
は俊成西行な
ど並ひ稱せられた
る歌人一七八七竹田
大夫一八三七竹田
者、裝束を整へて
關を過ぎしこと見
えたり

洞庭湖一支那
湖南省にあ

西湖・浙江省に
俱に浙江省に
あり

にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し衣裳を改めしことな
ど、清輔の筆にもとゞめおかれしとぞ。

松島

ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・
西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里イリミ浙江の潮を
湛シヅカふ。島々の數を盡して、鼓ツツミつものは天をさし、伏すものは波
に匍ムシ匍ムシひ、あるは二重に重なり三重に疊みて、左に別れ右に
連る。負へるあり抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠濃
やかに、枝葉汐風に吹きたわみて、屈曲おのづから撓ヤウめたる
が如し。ちはやぶる神代カミヨの昔、大山オホヤマ祇ツミのなせる業にや、造化の
天工、いづれの人か筆を揮ひ辭を盡さん。

平泉陸中國
西巖井郡。

石卷松島の
東北八里許の
處にあり

黄金花咲く
すめろぎの御
代榮えんと東
なる陸奥山に
黄金花咲く。
(萬葉集、大伴家持)

三代藤原清衡・
基衡・秀衡。
金鷄山高館の西
南にあり。
高館また衣川館
といふ。義經の籠
りし城址。

平泉

陸奥國

十二日平泉へところざし、あねはの松緒だえの橋など聞き傳へて、人跡稀に、雉兔芻蕘の往きかふ道ソコトコトモウチノ道そこともわかず。終にふみたがへて石巻といふ湊に出づ。黄金花咲くと詠みて奉りし金華山海上に見渡され、數百の廻船入江に集ひ、人家地を争ひて竈の煙立ちつゞきたり。想ひかけずかゝる所にも來れるかなと宿借らんとすれど、更に宿かす人なし。漸くまどしき小家に一夜を明して、明くればまた知らぬ道惑ひ行き、途中に一宿して平泉に至る。

三代の榮耀ヒトナイ一睡の中にして、大門の跡は一里此方にあり。秀衡が跡は田野になりて、金鷄山のみ形を残す。先づ高館にの

國破山河在、
城春草木深。
(杜甫)

おどろおどろ
し
さうさうし
殿上

ぼれば北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡等が舊跡は衣が關を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打ち敷きて時の移るまで、泪を落し侍りぬ。

夏草や、つはものどもが夢の跡。

(奥の細道)

八 五月闇

花山院の御時に五月雨も過ぎて、いとおどろおどろしくかき亂れ雨の降る夜、帝ヤヒさうさうしくや思召しけん、殿上に出

八 五月闇

四九

申しなる
むつかし

御堂殿藤原道長
六二六一一六
八七
道隆道長の兄
六〇七一六
五五
豐樂院節會等
行はる處。朝堂
院の西にあり。
道兼道長の兄
〇一六九五
仁壽殿内裏の中
央に位し。中殿と
東いふ。清涼殿の
大極殿朝堂院の
正北。内裏の西南
北。照慶門を距る
こと十一丈

照慶門朝堂
院の北の正

露臺紫宸殿
の北廂と仁壽
殿の南廣廂と
敷の間に在る板

でさせおはしまして、遊びおはしましてけるに、人々御物語申
しなどし給ひて、昔怖しかりける事どもなどに申しなり給
へるに、今宵こそいとむつかしイロイロなげなる夜なれ。かく人がちな
るだにかゝるを、まして物離れたる所などいかならん。さあ
らん所に一人行かんや。と仰せられけるに、皆、えまイロイロからじ。と
のみ申し給ひけるを、御堂殿、何處なりともまかりなん。と申
し給ひければ、いと興あることなり。さらば行け。道隆は豐樂
院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へ。と仰せられければ、
外の君たちは、よしなき事をも奏してけるかな。と思ひ、承ら
せ給へる殿原は、御氣色さへかはりぬ。
御堂殿はつゆさる氣色もなく、私の從者をば具し候はじ、誰

にてもあれ照慶門まで送らせ給へ、それより内は一人入り
侍らん。と申し給へば、帝、さるにても證なくてはいかゞ。と仰
せらるれば、實に然なり。とて、御手箱の小刀を請ひ申して立
ち給ひぬ。今二所も、せん方なげに出で給ひぬ。夜ははや丑に
もなりにけん。

道隆は何處より出でよ、道長は何處より出でよ。と路をさへ
別たせ給へば、各、その路より行き給へるに、道隆は暫しこそ
忍びておはしたれ、行手の松原の程にその物ナシトともなき聲ど
もの聞ゆるを念じわびて還り給ふ。道兼は露臺の外まで、顛
くくおはしたるに、仁壽殿の東面の軒の程に、軒とひとし
き人のあるやうに見え給ひければ、物オホエも覺えて、仰言承るも

命ありての上にてこそ。」と急ぎて還り参り給ふ。帝、御扇をたゝきて笑はせ給ふこと限なし。

さて御堂殿はいと久しう見え給はぬを、如何と思召す程に、いとさりげなく参らせ給へり。如何にく。」と問はせ給へば、事もなげに御刀に削られたるものを取り具して奉らせ給ふ。「こは何ぞ。」と仰せらるれば、たゞにて還り参り候はんには、證も候ふまじきによりて、高御座の南面の柱の下を、少々削りとりて候ふなり。」と申し給ふに、帝よりはじめ、感じのり給ふ。こと殿達は羨しきにあや、又如何なるにか、物もいはでぞ候ひ給ひける。

高御座

つとめて
藏人

猶疑はしく思召されければ、つとめて藏人してその削屑を

さるべき人

おしあてさせ給ひけるに、いさゝかも違はぬ由を奏しぬ。さるべき人は、はやくより心魂の猛くおはするなりけり。

(大鏡に據る)

九

坪内雄藏

風霜を挟む

彈丸雨飛の閒には、よく泰然として自若たるも、演壇に上りては顔色土の如く、手顫ひ聲戦き、筆を執りては句々風霜を挟み、凜烈當るべからず、讀む者をして覺えず戦慄せしむる力あるも、實務に當りては逡巡踟躕して、殆ど一小事をも英斷する能はざるなど、此の如きもの往々にしてその例に乏しからず。しかもこれ決して怪しむに足らざるなり。その勇

九 勇

三三

や、主として經驗と習練とに基づき自恃・自信たるに外ならざるが故に、經驗と練習とが伴なはざる方面に向ひては、その自恃心を移す能はざるがためのみ。

然らば眞勇とは何ぞ、眞勇とは、正を履みて懼れざるの勇なり。はじめより利害成敗を打算せず、榮辱は勿論、場合によりては生死をも眼中に置かず、爲すべき故に爲すのみ、往くべきが故に往くのみといふ意氣これなり。若し恃む所ありとすれば、それは唯正理と人道とを恃むのみ。その他には依る所なく恃む所なし。或は彼の宗教家の如く、神を恃み天を恃むといふことはあるべし。されどもその所謂神と天とをば正理人道と同一視して恃むなり。

文王已に歿し
論語子罕篇
に出づ。
斯文

自ら反して縮
からずば孟
子公孫丑上篇
に出づ。
富貴も淫する
こと能はず
孟子滕文公下
篇に出づ。

缺如

如

孔子、匡の厄に遭ふ、曰く、文王已に歿し、文こゝにあらざるや。天の斯文を喪さんとするや、後死の者、斯文に與る事を得じ。天の斯文を喪さざるや、匡人それわれを如何にせん。とこれ眞勇なり。或はまた、曾子が子襄に語りたりといふ勇の義も眞勇にかなへり。曰く、自ら反して縮からずば、禍穢トイフ博トイフといふとも、われ惴れざらんや。自ら反して縮くば、千萬人といふとも、われ往かん。と。なほまた、孟子に、富貴も淫すること能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はず、これをこれ大丈夫といふ。といへるも同じく眞勇なり。また神を恃み天を恃むといふも、彼の自家の徳を缺如してひたすら他力の擁護を頼み、自利これ求むる類の宗教心は

Shan

天、徳をわれに生ず。論語述而篇に出づ。

君子に三畏あり。論語季氏篇に出づ。

眞勇の範圍に入らず。天、徳をわれに生ず、桓魋それわれを如何にせん。といふ時の敬虔心とは、固より日を同じうして談ずべきにあらざるなり。論語に曰く、君子に三畏あり、天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。小人は天命を知らずして畏れざるなり、大人に狎れ、聖人の言を侮る。と。蓋し君子も賢人も畏るゝ所なきこと能はず。たゞその畏るゝ所のもの常人の畏るゝ所と異なるのみ。(通俗倫理談)

一〇 海運

海運の興廢消長は國家の盛衰を左右するものにして、國權の伸張國民の福祉（オランダ、オーストリア、イギリス、フランス、オランダ）に繋つて斯業の隆替に存するは、世界

福社隆替

彈丸黒子

イサベラ（西曆一四五一一一五〇四）

萬國の歴史が繰り返す所、古來一としてこの道理を踐まざるはなし。見よ、彼の歐洲の南端に位する葡萄牙は、彈丸黒子の一小國を以て夙に地中海の貿易を獨占し、遠く印度に航路を開きて、第十五世紀のはじめ、既に地上の霸權を握りたるに非ずや。而してこれと相隣する西班牙は如何。貞淑なる皇妃イサベラの海事に熱心なる、彼の亞米利加大陸の發見となり、威權赫々新大陸の盟主と仰がれたるに非ずや。その他和蘭の如き、一時は七萬噸以上の船舶を有して、宇内に跋扈したるに非ずや。或は瑞典、諾威の如き、區々たる半島國を以て依然大陸の間に介立し、その獨立を完くせるに非ずや。或はまた英國の如き、眇乎たる海中の一礁島を以て、しかも

殷鑑不遠。
(詩經)

その國威天下を風靡し、版圖六大洲に跨りて商略上、兵略上ともに宇内の第一位を占むるにあらずや。これ一として海權を恢弘し、航權を伸張するの結果に由らざるなきを得んや。又その蘭といひ、西といひ、葡といひ、曾て天下を睥睨せし勢も、盈つれば虧くる世の習、あはれ積年の國威衰運に傾き、史上たゞその殘影を留むるに至りしは、抑、また既往に得たる航權を失ひしに基因せずんばあらず、殷鑑遠きにあらず、我が日本帝國民たるもの、豈夫れ遠く宇内の大勢に鑑み、近く方今の實況に照して、大いに顧みる所なくして可ならんや。

且夫れ海運業の消長は、主として地理上の形勢に伴なふこ

フエニキヤ
地中海東海岸
にありし西
曆紀元前七
五十年頃まで
榮え、一時世
界通商の實權
を握れり
カルタゴ
のチユニス
附近にありし
市。アフリカ
の古
アテネ
の首府。
希臘
斗の如し

と多し。小亞細亞豆大の土を以て、能く富強の間に霸を唱へたるフエニキヤの如き、或は羅馬の大帝國を震動し、一時雄を海上に争ひたるカルタゴの如き、或は波斯百萬の大軍を挫き、之を西に進ましめざりしアテネの如き、いづれも海岸凸凹屈曲して、天賦の地形良好なるにより、早く海運の勃興を見たり。更に方今の海上王英國を見るに、その本國は四面環海の礁島にして、波濤岸を嚙んで、白浪翻盪し、天與の地形最も海運の隆盛に適す。たとひ豪膽斗の如き、アルマン人の勇氣なくとも、天與五千五百餘里の海岸線は、終に英國をして世界無比の海商國たらしめずんば已まず。況や由來英人は世界を以て家と爲し、海上を以て席となすに於てをや。

汪洋

顧みて帝國の地勢を察すれば、眞に是東洋の大英國、大小幾多の島嶼は、南北に延びて海岸線の延長凡そ八千哩、實に世界廣しと雖も、海國たる天分と地勢とに於て、いづれか我が國に若くものあらんや。西北一體は本土より一衣帶水を隔てて支那・浦鹽に對し、東は煙波汪洋として、太平洋を隔てて遙かに北米大陸に向ひ、南は比律賓・新西蘭等點々相接して、南濠の天に連り、西は印度洋・地中海を隔てて歐洲に通ず。又太平・大西兩洋間の交通を便ならしむるパナマ運河あり、亞細亞の北部を一貫する西伯利亞鐵道あり。我が國の形勢は此等を俟ちて一變し、世界海運の中心に飛躍し、局面益々多端を加へて、東洋は列國競争の燒點となり、政治的・貿易的の一大

四表

活劇場たらんことは、夙に識者の唱道する所に非ずや。今や國光四表に輝き國威八紘に及び、絶東の島國は一變して東洋の海國となり、東洋の海國は一躍して世界の強國となれり。名譽ある戦勝の光榮を荷うて、萬邦環視の中に立ち、益、その尊榮を増進せんと欲せば、須く三大洋上の航權を握るべし。而して之を握らんと欲せば、益、海運を興し、船舶を造り、海員を養ひ、航路を擴め、國民一致協同して進取的海國の大計を畫するに遺憾なきを期せざるべからず。海運勃興して國家の富強期すべく、海運發達して貿易振起すべく、海運隆盛にして殖民の事始めて語るに足るべく、海運昌榮にして工業興起すべく、その他百般の事業始めてこゝに完備す

るを得べし。

抑、我が帝國は、海國の要素に於て世界萬邦に比儔なき形勝を占め、實に未來海上の盟主たる運命を有す。故に海國としての我が長所を發揮すれば、世界の航權を握る、敢へて難きにあらず。何を以てか然かいふ。曰く港灣の多きと、曰く石炭に富むと、曰く勞働賃金の低廉なると、以上三件は海國の要素に於て必須缺くべからざるもの、而して我が帝國獨り之を完有す、誰かまたその未來の運命を疑ふものぞ。

(歐洲再航錄に據る)

一一 河村瑞賢

寛永十四年
三九七

德川氏の治世は概ね天下泰平ヤスラカにして、而も三百年の久しきに亙りしかば、從ひて商工業も發達せしが、寛永十四年鎖國の令を布き海外貿易を禁ぜし以來有爲の才を抱くものは商人とならず、寧ろ微祿カシコにても士籍に入り、小吏とならんとを欲するの氣風を生ずるに至りぬ。

倜儻不羈

されば商人中偉績を後世に垂れ、百代の模範となりしもの如きは、僅かに二三の指を屈するに過ぎざりき。殊にその人トシヤシヨリと爲り倜儻不羈にして、奇才人目を驚かし、遂に一代の富豪となりて其の才を漕運ソウウン・治水などの公共事業に移し、偉績を後代に垂れしが如きは、唯角倉父子と河村瑞賢とありしのみ。

角倉父子一丁
以三三四一三七
四及びその子
與一三三二一三
元二

元和四年一
三七六

瑞賢實名は義通、元和四年二月を以て伊勢に生る。年甫めて十三父正次瑞賢を其の友に託して江戸にゆかしむ。この頃より已に嶄然たる頭角を見し、他の少年と大いに異なる所ありきとぞ。其の後名を十右衛門と改め、後又安治と改む。天稟の才能を用ゐて之を商業に施し、忽ち巨萬の富を致し、賞をもて一代に雄視せり。平生近功小利を避け、務めて永遠の策を劃し、氣宇頗る宏大にして、何人もその才を窺ひ知る者なかりき。

抑航海術は足利氏の末より豊臣氏の時代にかけて發達せしが、寛永の禁によりて巨船を造ることを停められ、従ひて航海の術また頓に衰へ、これより海難に罹るもの頗る多く

舳艫相銜む

9

なりにき。江戸幕府の開くるや、西南諸道の船舶は舳艫相銜みて江戸灣に入り來り、沮滯の患なかりしが、奥羽二州の如きは、東北の邊要にありて稻梁多きも、水陸共に曠遠にして江戸に轉輸するの道なかりき。偶江戸に轉輸するものあるも、徒らに艱辛を極め、勞費最も多くして、漕利未だ廣からず。甚しきは人穀俱に没して、その跡を止めざるが如き慘狀を呈し、深く國家の患をなせり。

是に於て寛文十年庚戌の冬、幕府海運を習ひ漕事を掌るに堪ふるものを募る、瑞賢之に應ず。幕府遂に彼に命じて漕運の事を掌らしめ、先づ奥州の官糧數萬石を運漕せしめて其の方略如何を試む。瑞賢命を受けておもへらく、漕運の事固

退厥

より難し、然れども外船の海に泛びて鬻ぐものを見るに、如何なる僻壤退厥といへども、また到らざる所なし。我が東北の海運もその方法宜しきを得ば豈通ぜざるの理あらんや。と。かくて周く沿海の故老に詢り、遂に船體を擇ばざりしこと、水夫の熟練を缺きしこと、風汎を候はざりしこと等を悟れり。故に先づ部下の才幹ある者に旨を授け、實地に碇泊すべき港灣を視察せしめ、綿密精緻なる諸般の調査を遂げ、以て幕府に建議す。幕府悉くその議を容れ、瑞賢に海運を掌らしむることを沿海の各郡に命ぜり。かくて明年の春慎重に選擇して募雇せる各船を發し、自ら搭乘董督して糧米を輸し、七月に至りて海船悉く江戸灣に入る。海路一千五百里、風濤の險を冒して神速此の如く、また升斗の闕なし、しかも費す所舊時に比すれば大いに減少す。これより幕府の漕政一新せり。

搭乘董督

點勘

尋いでまた北運の命あり、寛文十二年羽州の漕運を起す。瑞賢おもへらく羽州は東北隅にありて最も僻遠たり。その漕道北海を涉り轉じて迫門内を過ぎ、南海を経て江戸に達す。迂回八千餘里、六十州の邊海を環ること殆ど一周、その間險を歴、危を冒すこと幾所なるを知らず。漕運の策深く沈思せざるべからずと、百方謀をめぐらし、沿途の諸港に漕務場十四所を置き運船を點勘せしめ、或は山腹に烽を置きて方所を知るに便し、或は嚮導船を設けて危礁を回避し、風雨潮汐

最上郡一羽前。
酒田港一羽前。
最上川の河口。

鱗次

の事を精査して之に備へ、最上郡の官糧を河運して酒田港に積出し、袖浦に轉搬して直ちに海船に搭載し、夏五月を限り次第に漕運を起さしむ。瑞賢酒田を發し、沿海諸國を巡訪して各港の漕務場を歴視し、北陸道を周閱し、山陰道を経て山陽道に出で、それより長州下關に至り、船に乗り海を渡りて西海道より長崎に到り、又下關に還り、防藝備播諸州の海路を歴覽し、大阪に到り、船を捨てて陸路を取り京師に出で、それより東海道を経て江戸に還りぬ。海陸行程九千三百里、跋渉の勞勤めたりといふべし。秋七月運船鱗次し、踵いで江戸灣に達す、隻船斗糧だに覆敗沈溺するものなし。東海、北海、古より漕運險難をもて患と爲ししに、是に於て開通し、漕政

安治川一大阪
中之島の西よ
り淀川を導き
て西せしめ、
海に會せし
む、河口の防
波丘を俗に瑞
賢山といふ。

振肅せられ、病弊盡く革る。瑞賢櫛風沐雨、國家の爲に赤心を竭し以て大計を建つ、忠なりと謂ふべし。幕府特にその勞を賞し、賜ふに黄金三千兩を以てす。この後奥羽二州の運糧のこと一切官吏に分委せられたりと雖も、管掌一に彼が定めし所の法制に照依せられ、永く定規となりぬ。また延寶天和の間攝河二州屢、水患ありしかば、幕府瑞賢に命じてその工役を掌らしめぬ。貞享二年二月役を起し、同じき四年に至り竣工す、其の後二州の民全く水災を免れ、安治川の名長く世に傳はれり。かくて元祿二年よりは、専ら各所の山場を掌り、金銀鑛の分解に従事せしが、同じき四年病をもて其の職を辭す。同十一年祿百五十俵を賜ひて士籍に列

元祿十二年
三三九

せらる、時に年八十なりき。是より先、佛に歸し禪に參し、自ら瑞賢といひしが、茲に至りて更に平太夫と稱し、なほ攝河二州の餘工を掌りぬ。同十二年全くその功畢り、三月江戸に歸りて復命せり。この年六月疫に罹りて歿す、享年八十二。彼、身を市井に起して、巨萬の富を致し、一個の請負商人をもて漕運の制を一定し、以て無窮の利を開き、更に治水の役に當りてよく大業を成せり。其の功績の偉なる、百代の鑑となすに足れり。嗚呼、彼もまた英傑なるかな。(芸窗雜載に據る)

一一一 凶荒異災

鳴 長 明

養和—安德天
皇の御代の年
號

養和の頃かとお、久しくなりてたしかにも覺えず。二年が間

ぞめき

なべてならず

みさを

念じわぶ

世の中飢渴して、あさましく^{アサマシク}儻りき。或は春夏日どり、或は秋冬大風・大水などよからぬ事どもうちつゞきて、五穀盡く稔らず。空しく春耕し夏植うるいとなみありて、秋刈り冬收むるぞめきはなし。これによりて、國々の民、或は地を捨てて境を出で、或は家を忘れて山にすむ。さまざまの御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行はるれども、更にその驗なし。京のならひ、何事につけても、みなもとは田舎をこそたのめるに、絶えて上るものなければ、さのみやはみさを^{カチハシ}も作りあへむ。念じわびつゝ、様々の寶物、かたはしより捨つるがごとくすれども、更に目みたつる人もなし。偶、易ふるものは、金を軽くし粟^{コメ}を重くす。乞食道の邊に多く、愁へ悲しむ聲耳にみ

大豆
ア
ヒ
エ

少水の魚

わびしる

すなはち

てり。さきの年かくの如くからくして暮れぬ。明くる年は立
 ちなほるべきかと思ふに、あまさへ瘦うちそひて、まさるや
 うにあとかたなし。世の人みな飢ゑ死にければ、日を経つゝ
 きはまり行くさま、少水の魚のたとへに叶へり。はてには笠
 うちき、足ひきつゝみ、よろしき姿したるもの、ひたすら家こ
 とに乞ひありく。かくわびしれたるものどもありくかと思
 れば、すなはち斃れふしぬ。築地のつら、路頭に飢ゑ死ぬるた
 くひは數もしらす。取り捨つるわざもなければ、臭き香世界
 に充ち満ちて、かはり行くかたちありさま、目もあてられぬ
 こと多かり。況や河原などには、馬車の行きちがふ道だにも
 なし。賤山賤も、力竭きて、薪にさへともしくなりゆけば、たの

丹

元暦二年
一八四

なる

たちど

むかたなき人は、自ら家をこぼちて市に出でてこれを賣る
 に一人がもち出でたるあたひ、猶一日が命を支ふるにだに
 及ばずとぞ。あやしき事は、かゝる薪の中に、丹つきしるがね
 こがねの箔など所々につきて見ゆる木のわれあひまじれ
 り。これを尋ねれば、すべき方なきものの、古寺に至りて佛を
 ぬすみ、堂の物の具をやぶりとりて、わりくだけるなりけり。
 また元暦二年の頃、おほなるふること侍りき。そのさまよの
 つねならず。山崩れて川を埋み、海かたぶきて陸をひたせり。
 土さけて水わきあがり、巖わけて谷にまろび入り、渚漕ぐふ
 ねは浪に漂ひ、道ゆく駒は足のたちどをまどはせり。いはむ
 や都のほとりには、在々所々堂舎廟塔一つとして全からず。

一一一 凶荒異災

寺社佛カク 五三

三三

築地

或は壞れ、或は倒れ、塵灰立ちあがりて盛なる煙の如し。地の震ひ家の壞るゝ音、いかつちことにならず。家の中に居れば忽ちにうちひしげなむとす。はしり出づればまた地われさく。羽なければ空へもあがるべからず、龍ならねば雲にのぼらむこと難し。おそれの中におそるべかりけるは、たゞ地震なりけりとぞ覺え侍りし。その中に、ある武士のひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、築地のおほひの下に小家をつくり、はかなげなるあとなしごとをして遊び居りしが、俄かに崩れうめられて、あとかたなくひらにうちひさがれて、二つの目など一寸ばかりうち出されたるを、父母抱へて、聲も惜しまずかなしみあひて侍りしこそあはれにかなしく見

いとほし

齊衡—文徳天皇の御代の二年五月五日のとなり
あぢきなし

侍りしか。子のカワイガルかなしみにはたけきものも恥を忘れけりと覺えて、いとほしく理道理かなとぞ見侍りし。かく夥しくふることはしばしにて止みにしかども、その餘波オトワタシしばしは絶えず。よのつねにオトワタシ駭く程の地震、二三十度ふらぬ日はなし。十日廿日過ぎにオトワタシしかば、やうやう閑遠になりて、或は四五度二三度、もしは一日オトワタシまぜ、二三日に一度など、大かたそのなごり、三月ばかりや侍りけむ。四大種の中に、水・火・風はつねに害をなせど、大地に至りては殊なる變をなさず。むかし齊衡のころかとよ。おほなるふりて、東大寺の佛の御頭落ちなどして、いみじきことども侍りけれど、猶このたびにはしかずとぞ。すなはち人皆あぢきなきことを述べて、いさゝか心のにこりも

薄らぐと見えしほどに、月日重なり年越えしかば、後は言の葉にかけていひ出づる人だになし。(方丈記)

一三 儉約

ト部 兼好

宣時—大佛陸
奥守宣時—北
條時政四代の
孫。
最明寺入道—
北條時頼。

銚子

平の宣時朝臣、老の後、昔語に「最明寺入道ある宵の間によばるゝことありしに、やがてと申しながら、直垂のなくてとかくせしほどに、また使きたりて、直垂などのさぶらはぬにや、夜なればことやうなりともとく。」とありしかば、萎えたる直垂内々のまゝにてまかりたりしに、銚子に土器とりそへてもて出でて、「この酒をひとりたうべむがさうさうしければ申しつるなり。肴こそなけれ、人はしづまりぬらむ、さりぬべ

紙燭

松下禪尼—北
條時氏の室。
安達景盛の
女。
せうと
義景—秋田城
介景盛の長
子。
けいめい

きものやあると何處までも求めたまへ。』とありしかば、紙燭さして隈々をもとめしほどに、臺所の棚に小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、「これを求め得てさぶらふ。」と申ししかば、事足りなむとて、心よく數獻におよびて、興に入られはべりき。その世にはかくこそ侍りしか」と申されき。

(徒然草)

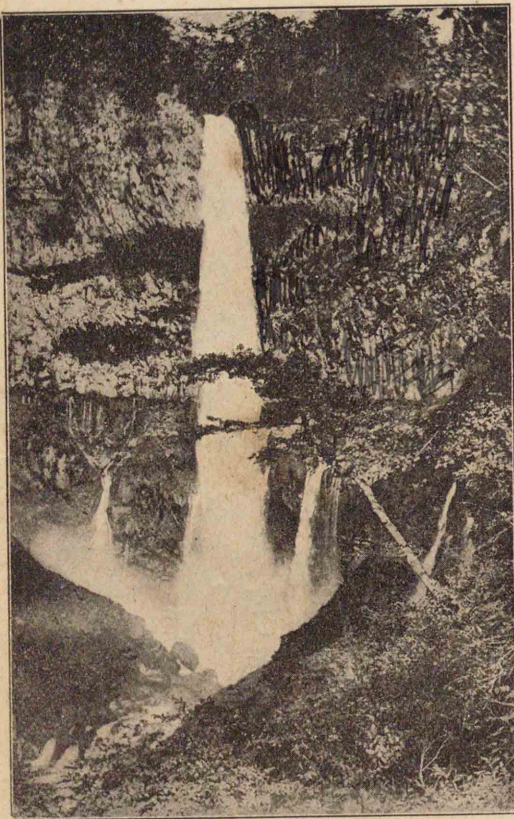
相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守をいれ申さるることありけるに、すゝけたるあかり障子のやぶればかりを、禪尼手づから小刀して、きりまはしつゝはられければ、せうとの城介義景、その日のけいめいして候ひけるが、たまはりて、なにがし男にはらせ候はむ。さやうの事に心えたるも

のに候。』と申されければ、その男、尼が細工によもまさり侍ら
 じ。』とてなほ一聞つつはられけるを、義景皆をはりかへ候は
 むは、はるかにたやすく候べし。まだらに候も見苦しくや。』と
 重ねて申されければ、尼も、後はさはさはとはりかへむと思
 へども、今日ばかりはわざとかくてあるべきなり。物は破れ
 たる所ばかりを修理して用ゐることぞと、若き人に見なら
 はせて、心づけむためなり。』と申されける、いとありがたかり
 けり。世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども、聖人の心に
 かよへり。天下を有つほどの人を子にてもたれける、誠にた
 だ人にはあらざりけるとぞ。トモフコトイハル (同上)

一四 華嚴瀑

大町 桂月

華嚴瀑は日光第一の大瀑なり。されど通常これを眺望する
 に、壑を隔てて、茶亭の前より懸崖を下り、瀑布の中央と相對
 する處に至れば、路窮りて最早これより下ること能はず。隨
 うて、李白の



日光華嚴瀑

所謂、飛流直
 下三千丈、疑
 是銀河落九
 天。この觀を逞
 しうするこ
 とを得ず。

日照香爐
 生紫煙遙看
 瀑布掛長川
 望廬山瀑布

翠塊
たゆたふ

われこの瀑を看ること前後七八回に及びけるが、別に瀑底に就くの途ありと聞き、一たび往きて見ばやと思ひたちて、瀑口より三四町ばかり上なる溪流の幅六七間ばかりの河身に横はれる岩々を跳びつたひてわたりたれど、通ふべき路は見えず。葛蘿を援きて岨崖を攀ちのぼり、熊笹の中をおしわけてすゝみ行くに、辛うじて瀑の右なる懸崖の上に出でぬ。やゝ下れば、勾配の急なる壁面に片石堆積して足をふみしむるに由なく、轉々として人は石と共に下り、遂に瀑底に至りて止む。仰ぎ見れば、一道の大瀑天を劈いて崩落すること幾百丈、無數の翠塊層々煙を吐いて、斷ゆるが如く又斷えざるが如く、始はたゆたふが如きも、その勢愈烈しくなり

瀧々

靑靨

洗々

甌底

歩虚の仙

もてゆきて、遂に轟然萬雷の音して潭底を撃ち、なほたてまはしたる絶壁の隙より、飛泉の瀧々として迸り出づるもの幾十條なるを知らず。潭中、鼎の沸くが如く、餘沫雪を吹いてまた寸碧を見ず。やゝ流れ出でて始めて靑靨として藍を染めたる迅流の洗々として岩を噛めるが、乍ちまた一曲し、四面を圍める峭壁蒼々として甌底の觀も啻ならず。見る見る一帶の白雲瀑の上頭を封じ來りて、巖に迷ひ樹を抱き、懸崖の半まで下りて、瀑と相對せる尋常の遊人も宛ら歩虚の仙かと疑はれ、鋸齒の重なれるが如き絶壁の間に飛びかふ幾百の岩燕も、一層の趣を添へていとをかしく、水石相鬪ふの音天地をとよもして、いさましくもまた物凄く、深淵の底よ

夏三十一日 三伏 初伏 中伏 六二

中等國文讀本卷七

六二

眞宰

三伏 生じ來れる激風餘瀝を飛ばして、衣裳悉く霑ひ、三伏の日といへども嚴冬の候に異ならず。體顫ひ齒戰きて久しく居るべからず。神靈の境ひとへに眞宰の妄りに人の足を著するを嫌ふものとぞ覺えし。

一五 嚴の鉾杉

香取のや、嚴の鉾杉風吹けば、

伊能穎則

神の雄たけび今もきくごと。

いくそたび、かき濁しても澄みかへる、 八田知紀

水やみくにのすがたなるらむ。

天地と立ちわかれけむ始ありて 千種有功

香取郡香取町
香取神社
に香取神宮あり
を祀る

はてこそなけれ、葦原の國。

度會延佳

皆人にたえぬ光を見よとてや、

今も神代の月は照るらむ。

あめつちと限りなかれと誓ひおきし、 藤原定家

神の御言ぞ、わが君のため。

一六 はてのみゆき

前田利定

人の世の歎きの數は數ありといへど、七月三十日の悲しさに如くものあらんや。六千萬の赤子が天地神明に祈ひ禱みまつりしかひもなく、大きみかどは遂に神去りませること、悔しくもまた悲しき極みなりけり。世はなべて涙の國とな

明治四十五年
祈ひ禱む

一六 はてのみゆき

六三

り、み民等は聲を呑み謹み慎みて喪に籠れる今年この夏の悲しさよ。

待たなく日數立ちて、秋毎に兵召してみそなはしし青山の原の葬場殿の設けも既に成りつ。今日しも御大葬の日となりて山清く水明かなる桃山にしつらひ奉れる常宮處に行幸せさせたまふ御首途送り奉るべき時は刻々に迫り來りぬ。

桃山陵―山城
國紀伊郡伏見
桃山にあり。

靈輜

東御車寄に添ふ朝集所に參り、靈輜御發引の御時刻を待ち奉りつゝ、天皇御在世の時を偲び奉る。己が最も近く拜謁し奉りしは、昨冬第二十八議會開院式の折なりき。天顏麗しく、玉音朗々敕語を賜はりし當時の事をおもへば、御聲猶耳に

殯宮

在るを、御異例の折の御事、殯宮に祇候せし夜の様、次々に目の前に浮び出で、今日はしも御大葬の夜にてありけり、朝集所に參りし身にてありけりと思へば、涙下ること限りなし。八時靈輜進御、鹵簿肅々として従ひまつる。

松明のひのかげあかう、嚴かに、

道芝の露を照らしゆくかな。

並敷の御衣

鈍色の布衣著たる仕人二列となり、松明に道照しゆく。白き御旗黄なる御旗も進み、御楯御鉾も進む。日像、(トウライイ、トウキ) 蠶旗、月像、(トウキイ、トウキ) 蠶旗も御弓、御箭も皆ゆく。事務官、祭官、宮内官續いて進む。笙、篳篥、笛、太鼓等の樂器は樂人の手に奏でられ、(ハルカ) 萬秋樂てふ道樂の曲は哀しき響を傳ふ。七葉の靈輜は五頭の牛これを輓き奉

道樂

旛

鈍色
布衣

道芝

道

一六 はてのみゆき

御起の五五 六五

る。陸海軍の將校御靈柩脇を護り奉り、侍從・侍從武官御後に扈從し奉る。靈輜の御金具ツクリ瓔珞の金色の光燦として打沈みたる夜色の中にきらめき、莊嚴いはん方なく、靈輜の軋るにつれ、哀音人の心を衝く。

泣くがごと咽ぶがごときみ車の、

響かなしう曾にしむかな。

靈輜今や二重橋を渡りまさんとす。

天顔麗しき先帝の名鹵簿を幾度か送り奉り迎へ奉りし此のみ橋も、今宵一度渡りまさは永久にかへりきまさぬはてのみゆきこそ哀しき極みなれ。大學へ行幸まししは、七月十日なりき。これぞ先帝が常の鹵簿にて、此のみ橋を渡りましし

竹の園生

最後にてぞありし。當時重き御病の御萌おほおはしましつらんに、學事を重んぜさせ給ふ大御心に、さりげなくて行幸ましけるにやと、今より拜察し奉れば、唯恐懼オソレタイの至に堪へず。三陛下恐れ多くも二重橋近く進ませられ、靈輜を御送り遊ばさる。哀別離苦の御情、かしかれども推しはかり奉るに涙のみこぼれ落つ。

御幼き御孫の皇子・内親王を始め、竹の園生の皇族親貴き御方々の愁然と立たせ給ふ御姿、遙かに見上げ奉るに、曾おほふさがる心地す。

靈輜軋りくははや宮城の外に進み給ふ。

み車の影見えぬまで、大君は

立ちたまふらし、み橋のもとに。

太后大みなげきをつゝみます、

御むねをぞ思ふ、かしこかれども。

鹵簿の末に加はりて、馬場先より右へ堀端に添ひ、虎の門を出で溜池通を青山へと向ふ。何萬燭光にかあらん、電燈照りに照りて眞晝の如きも、人の心の打沈みたれば、夜色却つて哀愁を惹く。堵列（直、様、並ぶ）の軍隊の後方に、幾側となく立ち並びたる市民士女は、肅然襟（オツツカ）を正しうして、靈輜を拜し奉る。沿道に幾十萬の人衆羣集すれど、今宵は水を打ちたらんが如く、いとも靜かに、唯其處此處に嗚咽の聲の忍びやかに洩るゝを聞くのみ。

嗚咽

まさやかに大路照らせど、電燈の

光もさびし、かなしき今宵。

十重二十重人垣つくり、み民等は

哀しきみゆき泣きつゝをろがむ。

全國皆兵の制をば布かせられ、敕諭を賜ひて、朕は爾等軍人を股肱とすとまで仰せ下し給ひ、畏き大御稜威（ヒイノリ）の下に二大戦役を経て、國光を八紘に發揚しつる陸海軍人に在りては、其の感慨や切に深かるべし。鹵簿の儀仗は、近衛の將士と海軍兵と之を承り、堵列して奉送せるは、第一師團を始め全國師團の代表部隊の諸兵にて、喪章附けし先帝御親授の軍旗を夜風に翻し、銃劔の光燦として最敬禮を行ふ。

便殿

幄舎

三千の工人が槌鑿丁々として日夜いそしみしつらひし御造營細工の功竣へ、靜かなる秋の夜に、明治聖帝の大御靈を爰に迎へ奉るべく、青山の原に嚴かに聳え立つ總門を入れれば、第一神門あり、これと並びて東掖門・西掖門あり、玉垣清らかにそを繞る。白木作の葬場殿を始め、便殿・樂舎・膳舎・棟をつらね、夜色深うして森嚴いふべからず。

靈輜の御跡に追隨して、諸員と共に定められつる幄舎の前に立つ。時に靈輜は進みて幔門の内に入らせ給へば、やがて葬場殿にこれを奉安す。

張り渡す黒き紗の幕ゆるがして、

秋の夜風のひややかに吹く。

檜皮葺白木の宮のおごそかに、

夜深き秋の空にたつかな。

廣々と地を劃してしつらひし、幄舎も、狹きまで人充ち満ちたり。明治聖帝の御勇武により、日の旗仰ぐ朝鮮・臺灣・樺太の人々の寄り集へるはいふも更なり。遠き海外の列國よりも、皇族或は大使を特派せられざるはなく、此等海外の皇族・使臣は、いづれも幄舎の上位にありて、哀悼の衷情を表せられぬ。之につけても、先帝が深く世界の平和に御心を留めさせ給ひ、好を東西に普くし、専ら國と國との交誼の敦厚を念とし給ひつる聖慮も偲ばれて、いとたふとくぞ拜し奉らる。奏樂・誄歌の中に、祭官、饌と幣とを奠し終りて祭詞を奏す、次

誄歌

誄詞

ぎに今上陛下、御拜禮あらせられ、親しく御誄詞を奏せさせ給ふ。

やんことなき御方々の御拜禮終りて後、諸臣一齊に拜禮し奉る。己等もあふれ落つる涙を拂ひつゝをろがみ奉る。

みあかしは、神々しくも、祭殿の

御前に侍る人を照らしぬ。

みわかれの哀しき時は、身を刻む

ごとくに迫る、かなしき時は。

靈柩は午前二時汽車に乗御、兩陛下停車場に出御あり、尋いで靈柩御發軔発車あらせ給ふ。喇叭一聲長鳴して滿場の羣臣一齊に拜禮奉送す。萬籟寂として天地聲を吞むものの如し。

發軔

兩陛下、御見送終りて、還幸せさせ給ふ。己等また夢の如く人波に送り出されて幄舎をまかり出づ。嗚呼青山の原、風蕭々として蟲聲長へに悲し。

ひやゝけき鐵路長し、とこしへに

かへりきまさぬ大行幸はや。

一七 明治天皇御大葬儀の誄詞

西園寺公望

内閣總理大臣正二位勳一等侯爵西園寺公望、泣血頓首、謹みて言す。靈輜、殯を啓かせられ、饋奠方に陳す。羣臣咸集り、友邦畢く會し、等しく聖儀の幽翳カクシを痛み奉る。恭しく惟んみるに、

饋奠

峻德

肇基

明治四年七月

明治天皇、叡智神のごとく、峻徳天に倅し、沖齡極に登り、武を神皇の肇基に踵ぎたまひ、國歩の艱難を排して維新の大業を成し、五條の誓文を立てて百代の國是を定めたまひ、藩を廢し縣を置き、制を革め治を興し、内は憲法を勅定して、軌範を不朽に垂れ、外は條約を改訂して、利權を永遠に伸べたまひ、法典を修め産業を奨め、兵備爰に整ひ、文教益振ふ。常に世界の平和に倦眷したまひ、殊に東洋の治安を軫念あらせられ、同盟を締び鄰交を敦くし、不運蔚乎として、我が武これ揚り、皇猷淵大にして、國威愈宣ぶ。盛徳洪業、寔に前古を曠しくして後代を光らす。伏して顧みれば、御宇四拾七年の閒天行至健にして、一日萬機未だ曾て逸豫し給はず。庶政咸舉り、蒼

倦眷
軫念
不運

天行健、君子以自強不息。
(易經)

昭代

率土

登遐

生永く頼り、均しく昭代の慶福を享け、舉りて萬壽の無疆を祝せしに、一朝不豫あらせられ、率土震駭し、天を仰ぎ地に踏し、神として禱らざるなし。吁嗟、蒼たる者は皇穹、胡寧ぞ弔まざる。大駕奄ち登遐して、永く兆民を棄てたまひ、靈枢咫尺に在して、御容長へに人天を隔つ。龍髯の攀づるに路なきを悲しみ、鳥號の尋ぬるに地なきを傷む。情塞り神逼り、復言ふ所を知らず。伏して冀はくは、在天の聖靈、それ臣等哀哀の微忱を愍み、偏に照鑒を垂れさせたまへ。臣公望、茲に百僚臣民に代りて、泣血頓首、謹みて言す。

黃帝採銅鑿鼎。鼎成有龍垂胡鬚。下迎帝。帝騎龍上天。羣臣後宮從者七十餘人。小臣不得上。悉持龍鬚。鬚拔。鬚不可拔。抱其弓而號。後世名其處曰鼎湖。其弓曰烏號。
(十八史略)

一八 武藏野

小島 鳥水

洪荒

芒といふ植物は、土地の原始を代表して居る。尠くとも月桂樹が榮光の標章となつてゐる如く、橄欖の葉が平和の幟牌となつてゐる如く、これといふ見所のない禾本科の一植物は、洪荒の宇宙を拓いて、そこに先づ自己が殖民地を作り、それから後人を呼んで、各人各時代の意匠に任せて歴史を描かせ、自分はその歴史の中心から遠退いて、輪廓だけを作つて居るやうに思はれる。

芒と聯想して、何人も憶ひ起すのは武藏野の原始的風光であらう。言ふ迄もないが東京の前身なる江戸が、猶殻中に包まれて居た時の外皮は武藏野で、武藏野の全身に毛髪となつて被さつて居たものは芒であつた。

余はこゝに江戸名所圖會の武藏野の條を引く。

南は多摩川、北は荒川、西は大嶽秩父嶺を限りとして總べて十郡に跨る。或は月影の草より出でて草に入るといひ、又は草の枕に旅寢の日數を忘れ、とふべき里の遙かなりなど、代々の歌人の詠に入れど、御入國の頃より、昔にひきかへ、十萬戸の炊煙霞と共にたなびき、纔かにその舊跡の残りたりしも、承應より享保に至り、四度まで新田開發ありて、耕田林園となり、往古の風光これなし。されど月夜狭山に登りて四隣を顧望する時は、曠野蒼茫、千里無限、古の狀を想像するに足れり。

こゝに狭山といふのは、同書に據れば、入間郡桑村から起つ

(二) 武藏野は月の入るべき山もなし、草より出でて草にこそ入れ。

(三) 草枕同じ旅寢の枕はらば、日數忘るゝ武藏野の原。(冷泉爲理)

(三) 夕煙とふべき里の遙かなる武藏野の原。(藤原經朝)

箱根崎—武藏國西多摩郡箱崎村。
多摩郡—今、南豐島郡と併せて豊多摩郡となれり。

匡房—(二七二—二七三)

て、西の方箱根崎まで、凡そ三里に餘れる連丘を指すので、一名を尾引山ともいひ、嶺の徑路は、多摩・入間の郡境で、南よりも北よりも、麓より登るところ二百歩餘あり。大江匡房卿が、淋しさに野邊に立ち出でてながむれば、

狹山が裾に鈴蟲の鳴く

多波山—多摩川の源地。

と歌つた處で、同じ狹山のつゞきの八國山といふのは、雲を凌ぎ碧空に連るといふ程の高い山でもないのに、こゝに登れば、眼界渺々として、實に駿河の富士、伊豆の天城、相模の大・山・甲斐の多波山、信濃の淺間山、上野の吾嬬山、下野の日光山、常陸の筑波山等、八國の遠山を一眸に收めるとしてある。此等の丘陵が今猶存して居るか否かは覺束ない。恐らくは

拓かれたり鋤かれたりして、大方畑にでもなつて居るであらうと想はれるが、前に引いた武藏野の條に、所謂曠野蒼茫、千里無限といふ處を讀むと、何よりも眼先にちらつくのは芒である。これは必ずしも、武藏野といへば、よく引合に出る古歌の

武藏野は月の入るべき山もなし、

尾花が末にかゝる白雲。

が先入主となつて居るばかりでなく、また偽書ともいふ北

條氏康の武藏野紀行に、

武藏野をかりゆくに、まことに行けども果あらばこそ、萩・薄・女郎花の露に宿れる蟲の聲々、あはれを催すばかりな

*續古今集、源通方。

氏康—(三七五—三七六)

典據

江戸を出て一之の句。一之は須田氏三(三〇—二五〇三)
 行末は後京極攝政藤原良經(元只—元突)の歌
 雉子鳴くや—蕪村の句。
 八平氏—坂東武者の平姓の者、千葉、三浦、肥後、秩父、庭の八家。長

り。
 とあるのを典據とするばかりでなく、現に武藏野の斷片となつて遺つてゐる澁谷・目黒・白金邊で、今も猶よく見る光景であることは、

江戸を出て、武藏野廣し、花芒。

といふ百年以前の句に盡されて居る。されば、

行末は空もひとつの武藏野に、

草の原より出づる月影。

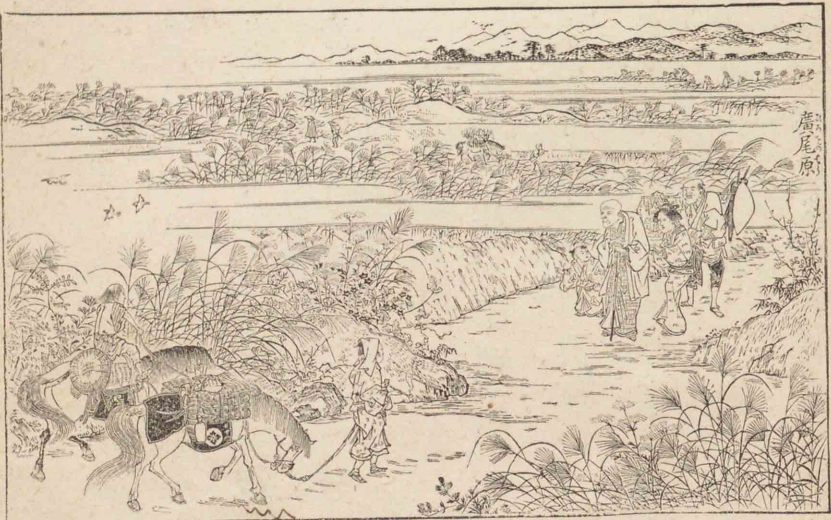
といふ古歌の草の原、および、

雉子鳴くや、草の武藏の八平氏。

といふ草の武藏は、皆芒の原、芒の武藏と解釋しても然るべ

廣尾原—豊多摩郡澁谷村にあり。幕府の頃、御鷹場の茅野なりき。今もその名残り。

相模ヶ原—相模國相模川と高座川の間に廣野。



原 尾 廣

きもので、名所圖會の、これも同じ武藏野のちぎれ袖なる廣尾原の寫生圖を見ても、滿野は悉く芒の模様である。國は違うが、武藏野の小模型ともいふべき相模ヶ原も、今現に、一半は雜木林と、一半は芒とで占領されて居る。芒は如何にも野毛である。平原を第一番に占領した主人である。芒の在る處に人間の

原始あり、創造ありといひたい。古今幾千歳、人類興亡の歴史が平原史であるとすれば、先づ平原史の表紙に描くのは芒であるといふことを忘れてはならぬ。殊に關八州の歴史は皆然りて、所謂三浦・和田・秩父・北條・千葉・上總等の坂東武者は、皆芒が吐き出した産物である。(山水美論)

一九 印刷術

芳賀矢一

江戸時代の學問興隆にとりて、一大便宜となれるは、印刷術の進歩これなり。印刷の術は、奈良時代に百萬塔の陀羅尼を刻せしを最古とす。而して佛者が淨財を集めて、經典を印刷する事は、近古時代にも聞々行はれたり。又後村上天皇の正

陀羅尼
淨財

正平十九年
二〇三四

外典

無垢淨光經
自心印陀羅尼
南護薄伽伐
帝納婆納伐
底喃一三獲
三佛陀俱旺
那更多設多
索訶薩羅利

百萬塔陀羅尼

平十九年に論語集解を印刷せしが如きは、外典版行の一例とすべし。されど世間一般に文字なき時代に於ては、固より書籍の需要なきのみならず、當時は彫刻の技に巧なる人も尠かりきと

不知言無以知人也
馬融曰：聽言則別其是非也。

堺浦道祐居士重新命工鏤梓

正平甲辰五月吉日謹誌

論語卷第十
經一千二百二十三字
注一千一百七十五字

學古神德措法下逸人貫書

正平版論語

見え、支那の刮字工ハケカキウを雇ひて、其の業に従はしめたるが如き、其の

一九 印刷術

八三

一字版

文祿二年
三五

術の極めて幼稚なりしを知るべし。戰國の末に至りて、朝鮮より一字版と稱ふる活字版を傳へたるは、印刷の上に至大なる便益を供せるものにして、文藝の將に大いに興らんとする氣運の磅礴せる時、恰もこの渡來あり。文祿二年、秀吉が

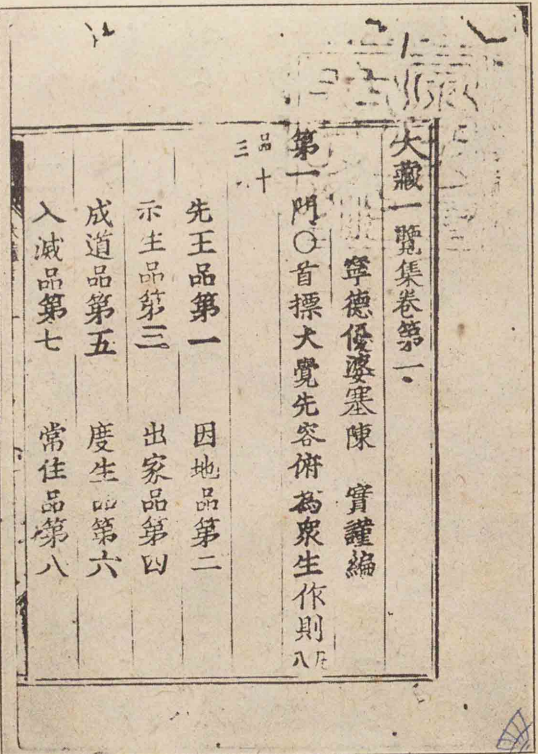
新刊日本書紀 神代上下

敕版本日書紀題簽

征韓役の時に方りて、

はやく古文孝經の印刷せらるゝを見、四年の後慶長元年には、蒙求の出版あり。時の帝後陽成天皇いたく學問を好ませ給ひ、同二年には錦繡段を、同四年には日本書紀を上版せしめ給ひ、爾後書籍の印行ひきも切らず。家康も亦孔子家語・貞

偃武



活字版大藏一覽

觀政要の諸書を版行せしめたり。元和偃武の後、島原の亂あり。この亂治りて後、幕府の根據は益固き

を加へ、随つて文運愈隆昌に赴きて、正保以後書籍の刊行せらるゝ事、年毎に多し。かくて國史・神典をはじめ、律令・制度・物語歌書の類、日本の古代を研究すべき古典も、漸次開版せらるる事となれり。平安朝に於ける假名文字の使用と、徳川初

期の印刷術の進歩と、明治時代の活版印刷の進歩とは、共に我文學史上に於て、新時期を開展せる三大事件と稱せざるべからざるなり。(國文學歴代選)

二〇 學の道

本居宣長

むかしは皇國のまなびとてことにすることにはなくてたゞからまなびをのみしけるほどに世々をふるまゝにいにしへんことはやうく陳にうとくのみなりゆきから國のことはやうくしたしくなりもてきつゝつひにそのことゝはもはらからさまにうつりはてて上つ代のことには物の意はさらにもいはず言葉だに聞きしらぬ異國のさへづりをき

漢意とは漢國のふり
を好むかの國を尊ぶ
の力をふるふにあらず
大にちにおの人の萬の事
善悪是れを論ひ物
の理を定めいふにひす
は漢籍の趣たるを
とえふ



本居宣長肖像

くがごとものうとくそなり陳にけるかくて後にいたりて皇國のまなびもはらとすることとはじまりつれどもしか漢意の久しくしみつきたる人心にしあればたゞ名のみこそ皇國の學にはありけれいひとあふことおもふこといひおもひとおもふことはなほみなからにぞありけるをみづからもさはおぼえざるなめりされば近き世まなびの道ひらけてよろづさかしくなりぬるにつけてもなかなかにそのからこ

とまじむはやまもいひ人さう
おぼえざるなめりされ

ろのみ深くさかりにはなりて古の意はいよ／＼はるかに
なんなりにけるをこのちかきころになりてぞそこに心つ
きぬる人の出で來そめて世は皆かりわからなることをさとりて
人も我もいにしへのこゝろをたづぬる意のあかりそめぬ
るしかすがに神直毘大直毘の神のましましける世はなほ
ゆくさきいとたのもしくなん。

二一 新井白石と本居宣長

上田 萬年

白石一三三七
宣長一三三九
一三三九
一三三九

新井白石と本居宣長とは、共に日本國民の誇るを得べき偉
人なり。而してこの兩偉人の間に存する著しき類似と甚し

き差異とは、吾人の考究リサーチに値するものあるべし。

士清一三三六
一三三六

先づ漢意を排し國學を復興せん事は、既に早く白石の唱へ
たる所ならずや。白石は漢文が我が國語の發達を妨げたる
を論じ、大に之を悲しみたり。白石は漢學者なり、しかも主客
の別を辨へたる漢學者なりしなり。この點より見て、宣長は
其の友谷川士清ツルカハと共に、大に白石に負ふものありといはざ
るべからず。尙其の事業の多面多種なること、兩者の間に著
しき類似をなせり。綿密なる財政家として、敏腕なる外交家
として、歴史家として、詩人として、さては西洋學の鼻祖始祖、卓見
に富みたる語學家として、驚くべく、多能多才なる白石は、皇
學及び神道を中心として、神學者として、歴史家として、又一

箇の語學家として、而して又たとひ秀拔なる地位を有し得ざるにもせよ詩人として、文學批評家としての宣長と、雙々相對して我が學界に異彩を放てるに非ずや。しかも此の兩偉人を比較して、殊に予輩の趣味を感ずるものは、蓋し他の一方に於て、奇怪にも多くの反對若しくは差異の點を認め得るによるなり。今此等の點を述べんとするは、單に興味ある事業たるのみならず、同時に又其の眞正の面目を發揮するに必要なればなり。

白石と宣長との間に存する反對の點は、第一に、白石の峻嚴秋霜の如きに對し、宣長の溫厚春風の如きにあり。一方は廟堂に立ちて堂々の議をなし、君の忌諱に觸れて毫も顧みざるに、一方は庵を結び鈴を鳴らして從容自適す。性格の差異

讀史餘論十二卷。古今天下の大勢を論述したるもの。
東雅二十卷。我が邦物名の釋。
東音譜一卷。我が邦音韻の事を説きたるもの。

驚くべきに非ずや。第二に、白石が弟子を遺さざりしに反し、宣長は全國に門弟を有し、享和年間に至りては、其の數四百九十人に上り、全國中、門人無きは唯二箇國なりきとぞ。第三に、白石は政治上の偉能あり、宣長は此の方面にては殆ど無能なり。性格と時勢とは、自ら此の如くならしめたるなり。第四に、兩者は同じく博學多識なれども、白石は事物の實質に立ち入りて創始を喜び啓發を事とせるに、宣長は考證を基とし、既成の事物を綜合組織するに長ぜり。讀史餘論を見よ、東雅を見よ、東音譜を見よ。前人を抜き出づる白石の創始的才能は明かに見るを得べし。之に反して古事記傳を見よ、詞

古事記傳 四十八卷。宣長が三十五年の歳月を費して、古事記を注釋したるもの。詞の玉の緒一六卷。證歌を引きて、係結の呼應にて、心はの性質を説きたるもの。漢字三音考一巻。漢唐の三音に就きて論じ、國語の純正なるを説きたるもの。

藩翰譜 十三卷。江戸の初期に於ける三百三十七名家の傳記沿革を集録せるもの。折りたく柴の記 三卷。白石の自傳。玉勝閑 十五卷。宣長の隨筆。

の玉の緒を見よ、漢字三音考を見よ。前代及び其の同時代の學問は偉大なる手腕の下に統一せられて、後世發達の基礎の茲に置かれたるを知らん。第五に、白石は理を本とし、宣長は信仰を本とせるを見る。一方は科學者なり。一方は少くも或る度までは宗教家なり。彼は韓・梵語・宋・元の音進んでは西南洋の蕃語までが、國語の中に侵入したるを説き、此は鼻音を排し、半濁を説き、溷濁なる外國音の清純なる國音を侵す能はざるを説く。第六に、白石は實地の日本に向ひ、宣長は理想の世界に進み入らんとす。讀史餘論・藩翰譜・折りたく柴の記を讀んで、記傳・玉勝閑に及ばば、著しく逕庭を感ずべし。第七に、其の生涯の徑路に大いなる差異ある事はいはでもあ

土屋侯一上總久留利の藩侯の子を頼直といふ。堀田一下總古河侯堀田正俊。甲府一徳川家宣。

紀州侯一徳川治寶。山室山一伊勢國飯南郡花岡村。

るべし。土屋侯の一足輕の子として人を驚かしたる幼年時代と、失意に満ちたる中年時代とを送りたる後、堀田・甲府二侯に歴仕し、忽ちにして天下の大事に參與し、榮譽寵遇を極めたりしも、六十一歳、時勢の變に遇ひ、一朝にして榮辱地を換へ、寂しく晩年を送りたる白石と、木綿問屋の息子として十分なる普通教育を受け、書を好むが故に醫を學ばしめられ、紀州侯の奥殿に奉仕して、靜かに好學の心を養ひ、家には二男三女を擁し、遂に山室山に千歳の春を樂しめる宣長と、驚くべき境遇の變化は、又其の性格に差異を生じたる一の原因なるべし。第八に、一は伊勢の如き平和の地に生れて、徐に其の學問を發達せしめ。一は江戸の如き混亂の渦中に投

じて世と戦へり。

白石と宣長とは、性格・境遇の差異此の如く大なれども、等しくこれ日本の人傑にして、同一の大なる天才が兩箇の極端に發達せる好例を遺せるものと謂ふべし。

二二 月

島崎藤村

あゝ時として月見れば、
空しき天の戸を渡る、
澄める鏡と見えにけり。
ある時はまた世に近く、
いざよひ渡る横雲に、

いとなれ易く見えにけり。

また時として眺むれば、
いとも常なき世を超えて、
朽ちず盡きせず見えにけり。
ある時はまた影清く、
圓かに高くかゝれども、
疾く虧け易く見えにけり。

また時として眺むれば、
光の絲に夜と朝を、

繋ぎとゞむと見えにけり。

ある時はまた冷かに、

花と草とのわかちなく、

世を照すかと見えにけり。

また時としてながむれば、

昔も今もさまよひて、

行方も知らず見えにけり。

あるときはまたさだめなき、

浮べる雲に枕して、

眠靜かに見えにけり。

二三 君臣奇遇

新井白石

享保七年八月
新井白石
より佐久間洞
巖におくれる
書簡この時
白石六十六
歳、洞巖七
歳、その季
市郎九歳子

先頃は兩函の御細書相達し、繡兩袋御贈り下され、毎々淺か
らず忝く候。彌、御無事の由承知致し大慶に存じ候、此方某事
も異事なく、一家先づ安穩に候。下され候萩も盛りに候て、紫
白ともに快く瑁瑰も花おくれ候へども咲き候て閑寂を慰
し候事に候。宮城野の草花ども思召よられ候由忝く存じ候。
拜見致し候御詩も御返答の心がけ仕るべく候。此程は取込
候事共種々にて、その暇もなく候。中秋毎に、三十年來一年
もかけ候はで共に月を賞し候ものだに、雨中にて來らず候
て、無興の事にて候。

那堪今夕景。不似去年晴。天到中秋暗。人同子夏明。交遊空舊態。衰老尙餘生。雲雨如翻手。非關世上情。

土肥一名は元成、通稱源四郎、霞洲と號す、徳川幕府の儒員なり。

土肥など後日の和も候ひき。善くもなく候へども、中秋子夏の對など土肥など感慨し候由申候まゝ、寫し御目に懸け候。「翻手爲雲覆手雨。」は杜詩を用ゐる候。申し度事山々ながら、右申し候如く、當時取込候事のみ多く、申殘し候。此扇子二柄、それにはいかゞやらん、此方にては加賀扇とて得がたきものやうに好事の衆申され候。某は縁候て今年も貰ひ候まゝ、めてたく末にひろごり候様心祝に進じ候。監本四書一部、市郎殿へ、御讀書もすでに論語に及び候を承り候まゝ、進じ候。委曲は市郎殿へ口上書一通添へ進じ候。讀み聞かせられ下さ

監本

るべく候。一生の學問御聞及の如く未成の事にて、取るに足らず候へども、君臣奇遇の事に於ては、御あやかり候てもこれは他に譲らぬ事故、御祝に進じ候までに候。何事もく干里を隔て候へば、筆には申し盡し難く候。萬緒御恕亮に過ぐべからず候。恐惶謹言。

八月廿八日

君 美

洞巖老人

梧 右

* * * * *

過ぎし頃、家翁より御しるしなされ候もの遣され、一覽驚嘆の事に候。御讀書も御精出で候由傳へ聞き候て、何よりの御

事に候。此度幸便に任せ、監本四書一部進じ候。珍しからぬものながら、この書にて、某三十七歳の時、始めて前々代に進講致し候故、私家にては祕藏ヒツカウし候ものに候へども、所存これあり譲りまゐらせ候間、めでたく御成長候て、家聲をも振はれ候へかしと存じ候迄に候。某は既に衰老致し候。御成立の後思召し出され候爲に候。以上

八月二十八日

白石

市郎どのへ

二四 金陵

佐々木信綱

金陵は古の秣陵建業の地、禹貢揚州の域に屬し、春秋には吳

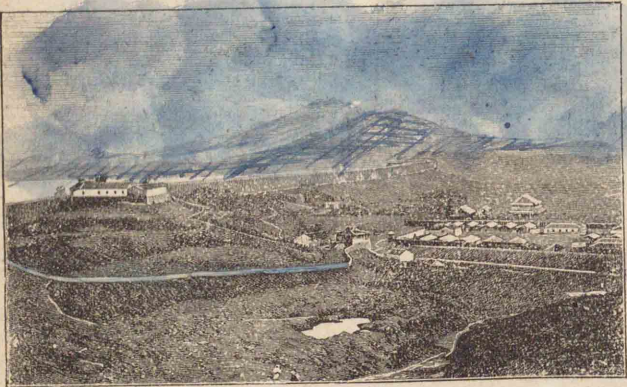
禹貢一書經の篇名。揚州は禹貢九州の一なり。

大遼
金陵
春秋時代

秣陵
建業
三國時代

業に

大遼



江蘇江寧雞鳴寺

に、戰國には越と楚とに屬せり、吳の孫權茲に府を開きしより、東晋・宋・齊・梁・陳、相踵いで都を奠めしところ、江南の繁華ここに聚りて、萬戶殷富、文華風流、海内に冠絶せし地なり。然るに王氣銷盡してより、業に幾百載、干戈兵燹の厄を被りたること、亦幾十回、近くは髮匪ケツパイの擾亂に遭ひ、繁華と風流とは地を拂うて空しく、瘡痍終に復せず。しかすがに六朝以來の名都、江南の雄鎮ユウジンとして、城壁宏雄、廣街大遼チヤウ整齊して四通五達し、高

磚瓦

愁緒

憑弔

廈峻樓簷を接すと雖も、殷賑の中に自ら蕭颯の氣あり、閒雅
 の中に衰殘の色なき能はず。坦々たる大道も處々崩壞して
 磚瓦くづれ、溝渠久しく浚はざれば、汚水路傍に溢れ、往々雜
 草の茂れるを見る。その市街の端に至れば、屋舍纔かに斷續
 して建てるのみ。破村荒驛、客子の愁緒を惹くよりも、却りて
 劫後の大都、凄愴の氣、暗涙を催さしむること多し。薄暮客窗
 より目を眺すれば、一望すべて荒涼古都の秋風蕭索として
 聽くに忍びず。乃ち起つて聚寶門を出で、報恩寺の址を過ぎ
 り、雨花臺に上る。形勝を觀覽し、山河を憑弔し、以て鬱結の愁
 懷を遣らんとするなり。
 雨花臺は金陵城外にあり、眺望廣闊、形勝雄偉、東北は中原萬

滾々 透迤

里蕩々たり荒々たり。目の極る所、天と地と相連りて際涯な
 く、頭を回らせば、長江は西南の天際より滾々として流れ來
 り、舟楫相逐うて水に隨ひ、逶迤曲折して東流し、また蒼茫た
 る天涯に向ひて没し去る。
 仰ぎては天の蒼々たるを瞻、俯しては地の茫々たるを瞰る。
 この天や地や、曾て三代の人を覆ひぬ、周時の人を載せぬ、秦
 漢三國以還、歷世の人を覆載せり。上古に溯回すれば、苗漢兩
 種の鬪争場たり。上代文化の發展地たり。降りては晉吳の戰
 地たり、六朝文華の中心たり。更に降りては明室の嬰守して
 以て根據地となしし處、噫、於戲、目を擧ぐれば、山河を見るの
 み、古人を見ず。何人か徘徊顧望して、愴然として涕下らざる

ものぞ。

二五 熊野落

般若寺—大和
奈良坂の南
笠置—山城相
樂郡。木津川
の南岸にあ
り。
虎の尾を履む
おそれ

一乘院—大乘
院と共に、奈
良興福寺の寺
務門跡たり
き。院址興福
寺の北にあ
り。

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞き召されんために、
暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城既に
落ちぬと聞えしかば、虎の尾を履むおそれ御身の上に迫り
て、天地廣しと雖も御身を藏さるべき所なく、日月明かなり
と雖も長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて、露に
臥す鶉の床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻にぞみて、人を尤む
る里の犬に御心を惱まされ、何處とても御心安かるべき所
なかりければ、かくても暫しはと思召されける處に、一乘院

候人

の候人按察法眼好專、如何して聞きたりけん、五百餘騎を率
して、未明に般若寺へぞ寄せたりける。

折節宮に付き奉りたる人、一人もなかりければ、一防ぎ防ぎ
て落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、透間もなく兵既
に寺内に打入りたれば、紛れて御出あるべき方もなし。さら
ばよし自害せんと思召して、既に推膚脱がせ給ひたりける
が、事叶はざらん期に臨みて、腹を切らんことはいと易かる
べし、若しやと隠れて見ばやと思召し返して、佛殿の方を御
覽ずるに、人の讀みかけて置きたる大般若經の唐櫃三つあ
り。二つの櫃は未だ蓋を開けず、一つの櫃は御經を半過ぎ取
り出して蓋をもせざりけり。此の蓋を開けたる櫃の中へ、御

隱形の呪

身を縮めて伏させ給ひ、其の上に御經を引きかつきて、隱形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。若し捜し出されば、頓て突立てんと思召して、氷の如くなる刀を抜きて、御腹にさしあて、兵こゝにこそと言はんずる一言を待たせ給ひける御心の中、推し量るもなほ淺かるべし。

去る程に、兵佛殿に亂れ入りて、佛殿の下、天井の上までも、殘る所なく捜しけるが、餘りに求めかねて、是體の物こそ怪しけれ、あの大般若の櫃を開きて見よ。とて蓋したる櫃二つを開きて御經を取り出し、底を翻して見けれどもおはせず。蓋開けたる櫃は見るまでもなし。とて、兵皆寺中を出て去りぬ。宮は不思議の御命を續がせ給ひ、夢に道行く心地して、猶櫃

玄奘唐僧西域に居ること十七年大般若經六百卷はその譯する所なり。

摩利支天帝釋天の眷屬。若有知念者、彼人亦不可見、亦不可捉云云。(摩利支天經)十六善神護法之神。

の中におはしけるが、若し又兵立ちかへり委しく捜す事もやあらんずらんと御思案ありて、頓て前に兵の捜し見たりつる櫃に入り替らせ給ひてぞおはしける。案の如く、兵共また佛殿に立ち返り、前に蓋の開けたるを見ざりつるが覺束なしとて、御經を皆打移して見けるが、からくと打笑ひて、大般若の櫃の中をよくく捜したれば、大塔宮は居らせ給はで、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。と戯れければ、兵皆一同に笑ひて、門外へぞ出でにける。これ偏に摩利支天の冥應又は十六善神の擁護に依る命なりと、信心肝に銘じ感涙御袖を濡せり。

かくては南都邊の御隱家も叶ひ難ければ、乃ち般若寺を御

柿の衣
笈頭巾
先達巾

出ありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。宮を始め奉りて、御供の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半にせめ、其中に年長ぜるを先達に作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。この君、元より龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めて叶はせ給はじと、御伴の人々豫ては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮・脚巾・草鞋を召して、少しも草臥たる御氣色もなく、社々の奉幣宿々の御勤懈らせ給はざりければ、路次に行き逢ひける道者も、勤修を積める先達も、見尤むることなかりけり。由良の湊を見渡せば、澳漕ぐ船の梶

單皮
脚巾

濱木綿

出關然暮一沾
愛。熊野産生古戦
場。孤村樹色昏殘
雨。遠寺鐘聲帶夕
陽。(廣倫)
切目王子一紀伊國
日高郡切目にあ

をたえ浦の濱木綿幾重とも知らぬ浪路に啼く千鳥、紀路の遠山渺茫と、藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上を外に見て、月に瑩ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀を催す時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。その夜は叢祠の露に御袖をかたしきて、夜もすがら祈り申させ給ひければ、丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと、神慮も暗に測られたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御目睡ありける御夢に、鬢結ひたる童子一人來て、熊野三山の間は、猶も人の心不和にして、大義成り難し。是より十津

三山一本宮
新宮那智
鬢

河の方へ御渡り候ひて、時の到らんを御待ち候へかし。兩所
權現より案内者を附け進らせられて候へば、御道しるべ仕
るべく候。」と申すと御覽せられ、御夢は即ち覺めにけり。これ
權現の御告なりけりと憑しくおぼしめされければ、未明に
御悅の奉幣を捧げ、やがて十津河を尋ねてぞ分け入らせ給
ひける。

山路元無雨、
空翠濕人衣。
山復山、何工
削成青岩之
形。水復水、誰
家染出碧潭
之色。(和漢朗詠
集)

其の道の程三十餘里が間には絶えて里人もなかりければ、
或は高峯の雲に枕を敲て、苔の莖に袖を敷き、或は岩漏る水
に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なく
して、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁刀に削り、見
下せば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間、かゝる險難を経さ

せ給へば、御身も草臥はてて流るゝ汗水の如し。御足は缺け
損じて草鞋皆血に染まれり。御伴の人々も、其の身鐵石にあ
らざれば、皆々飢ゑ疲れて、はかなくしくも歩み得ざりけれ
ども、御腰を推し御手を引きて、路の程十三日に、十津河へぞ
着かせ給ひける。(太平記)

二六 常陸帶

藤田 彪

過ぎにし己丑の年、中納言の君世を繼がせたまひし時、彪歳
二十あまりにて、皇朝の史を考へ定むるわざしてありける
を、明くる年、青人草を撫て治むる職を仰せて、江戸小石川な
る屋形に召され、はじめて君を拜み奉りけるに、彪が職の事

己丑—文政十
二年。(二四八)
中納言—徳川
齊昭。
青人草

常磐堅磐

いと懇に問はせ給ふ。しかのみならず、忠孝の義を明かにし、文武の道を勵まし、祖宗の遺志を繼ぎ、東照宮の恩賞に報いて、天日嗣を天地と共に仰ぎ奉りて、豊葦原の中國を常磐堅磐に守りなんと志し給ふ御事まで仰をかしこみ、種々の物賜はりなどして故郷にまかりぬ。これをはじめとして、辱くも屢、御書下したまはりて、政を正しうし惠を施し、あしびきの山里に住める賤が男までも、安く樂しみて世を渡るばかりのさまに、なしなんことをはかり給ふぞかしこき。

三年ばかり過ぎぬれば、彪職をかへて御側近く事へ參らせ、又四年ばかり過ぎぬれば、職をかへて政の末にたづさはりたれど、身の程はなほ卑くてありしを、又五年ばかりの後仰

おほけなし

庚子—天保十一年。(三五〇)

大將軍—徳川家齊
右大將—徳川家慶

錦を衣て—張
既爲—雍州刺
史。太祖謂レ既
曰、還レ君本
州、可レ謂レ衣
錦畫行—矣。(魏
志)

を蒙り、おほけなくも年寄。若年寄などいへる職に續きて、政をものすることをつかさどり、いにし庚子の年の春、君に従ひて大城にまゐるのぼり、かしこくも大將軍の君と右大將の君とを拜み奉り、君の御供して故郷に歸りぬ。

去年の夏、君日光山に詣て給ひ、五月の中つかた暇を請ひ給ひし時、彪もまた大將軍の君と右大將の君とを拜み奉りけるに、五日ばかり過ぎぬれば、大將軍家殊更に御使を以て君を呼び給ひ、何くれの事ほめ給ひて、黄金作の御佩刀に種々の物をへて、君にまゐらせ給ふに、君も臣も悦び勇み、錦を衣て畫行く心地して、故郷にかへりけり。

未だ一年も過ぎざる年の卯月末つかた、君暫し江戸に參り

あや

給ふべき旨、老中の人々仰を傳へしに、君もとより大將軍を敬ひ給へば、彪等物も取りあへず御伴して小石川の御屋形に著せしは、五月五日の日巳の時ばかりなりけり。人皆嬉しきためしを引きて、あやめ草あや珍しく侍るに、思ひきや、明くる日、君はやがて世を遁れ給ひて、駒込なる屋形に籠り給ふべき仰を蒙り給はんとは。彪も何某等と共に職をはなたれ蟄り居るべき仰を畏まりぬ。彪等が身は、陌の塵、濱の眞砂に等しければ、散り失せんも浮き沈むも、物の數ならねども、ひたすら、忠孝文武の道にのみ心をよせ給ひて、世にたくひなき君の、いかにしてかゝる禍事に遭ひ給ふらん。花を待つ梅が枝に、寒けき風吹くたくひ、ひさかたの月は清めるを、夜

蟄る
陌の塵

禍事

御褌

草枕

半の浮雲立ちかくすためしにやあるらん。
をりしも五月雨いたく降り續きて、いとゞあはれをそへしが、月日經て空は晴れぬれども、涙の袖は乾きだにせず。いつか御褌もすぎ秋も半になりぬれば、世を浮雲の絶間なく、又しも霖雨ふりいだし、板屋の軒端を廻る雫の音、荒庭の草葉にすだく蟲の聲、聞く物見る物につけて、君を慕ふ心はいやまさりければ、草枕旅の宿りに、つくゞと十年餘りの事を思ふに、或は豊榮昇る朝日の影に兜の星を輝かし、若草もゆる春の野に駒の足を竝べて、治れる世に亂れを忘れざるためしを引き、秋風にかゝる隈なき月の夜は、樓船に棹さし出で、眺めも廣浦の最中に、詩歌管絃の興を催し給ひ、或は道弘

人づて
聞え上ぐ

しづのをだま
き

むといふ館に、若き男等に文學び槍・太刀使ふ業を試み給ひ、
或は偕に樂むといふ園に、年高き人々を招きて、四方の景色
に心を慰め、物など賜はりて老を養ふふるごとを慕ひ給ひ、
或は霜の夜雪の朝、山野に鷹狩して御身をならはし、或は五
の窗、繩のとぼそに至りて、貧しき民の情を知り給ふたくひ、
其のをり毎に御側近く侍りて、畏くも御樂みをも御苦みを
も共にし參らせしに、今は君も臣も彼方此方に籠り潛まり
居て、思ふ事人づてもて、聞え上げんことだにかなはぬ世と
なりぬれば、去年の五月の事は夢にやありけん、今年の五月
のこと現にはよもあるまじなど、しづのをだまき繰り返し、
昔を思ひいづるまにまに、書き綴りて君に見えぬる心地を

水莖

細き管もて
用管窺天、
用錐指地。
鼎の中一嘗
一樹肉、知
子饒之味。(淮南)

なし、徒然を慰むるほどに、水莖の跡積りて机に満ちぬれば、
分ちて上下二卷となし、名づけて常陸帶といふ。たれこめて
獨り住む身は、俱に語り合はん人もなく、假初の旅の宿には、
考へあかすべき書もなく、全く彪が見聞きたる事をくりい
だしてしるししものなれば、細き管もて大空を窺ひ、鼎の中
なる一きれの肉を嘗むるにひとしかるべし。
抑昔より忠臣孝子ともいはるゝ人の、世の禍に遭ひて覺え
ず罪蒙れるもの少からず。異國のことは擧げて數へ難く、又
近き世の事は憚りあればいはず。菅原の大臣は誠を盡して
寛平の政を補ひたれども、讒者の爲に西のはてなる筑紫の
配所に赴き、大塔の皇子は身を竭して、元弘の亂を平げ給ひ

さもこそあら
め

しかども、姦臣の爲に東の鄙なる相模の窟に潛み給ふ。いとあさましく、いとつれなきわざにはあれど、年を経世を重ぬるに従ひ、其の名いやましに芳ばしく百千年の今日まで、稚き童兒賤しき民までも、尊びかしこめるをもて見る時は、我が君一たび浮世の禍に遭ひ給ふとも、千年の後までも御名かがやきて、萬代の鏡となり給はんこと著し。しかはあれど、現の世には得明かならで末遠き世をまちなんこと、天が下の亂れたる時はさもこそあらめ、今九重の雲曇りなく、ますみの鏡明かにして、朝廷の御惠至らぬ隈なく、殊に大將軍の君は、玉鉦の直なる道を慕ひ給ひて、萬の政邪なるを去りて正しきにつき給ふこと、諸人の仰ぎ奉る所なれば、ひとたび

さきはふ

は青蠅なす輩に任せ給ふとも、東照す神の御靈の、さきはへ給ひて、平かにひろく見はるかし給はんには、寒けき風和ぎて、長閑なる春の日に、梅が色香見する如く、立ちおほへる浮雲消えうせて、さわやかなる秋の夜に、月の光さやけきが如くに、我が君もとより曇りなき御心殊に著しく、濁にしまぬ御身殊にすがすがしくなり給はんこと、疑ふべくもあらず。さらば板びさし雨も、る假のやどりに、昔をしのびて涙に沈める賤が身も、曇れる眼おし拭ひ、そぼてる袂打拂ひて、常陸帯のためしを引きて、再び君を拜み奉る事のあらざらめやは。(常陸帯)

そぼつ

板びさし

すがすがし

